岩波講座 日本文學

言語學概論

新村出

岩波講座 日本文學

言語學概論

新村出

岩波書店

言語學概論

新村出

日本文學講座の最初に南蠻文學について書いた私は同じ講座の最後に言語學概論について書かねばならぬ因緣に際會した。與へられた餘裕と紙數との寛大であつたにも拘はらず昨今の押詰つた公私の事情は私をして遂に概論中の序說くらゐを辛うじて草せしめるだけの餘日しか與へない。讀者と編者とに對して心苦しく思ふ。私はむろん最初から概論を概論として書くよりも、むしろ日本文學講座中のものとして、主として日本の言語文字文學の研究に少しでも參考になる樣な實質と形式とに概論を書いて見たいと思つてゐたのである。私はすでに東方言語史叢考の序文等に於て自白したやうに元々自分の母國語より言語研究に向つて出發した。自分の國語の現在および過去の狀態の觀察と說明とから發途して時に國語の將來の趨向に對する見解を作り進んでは出來るだけ同じ方法によつて遠近古今の他國語との對照や比較を試みつゝ言語一般の研究に向つた。從つて自分の此の小心ながら堅實な態度からすると、特に此の種の講座中に於て言語學の概論めいたものを書くのが、最も適當な仕業であらう。回顧してみると、自分は口に筆に幾度となく西洋の言語學說の或るものを紹介し祖述したこともあり、今尙ほそれを決して無用とは思はないのであるけれども、西洋系統の言語學がその端緒を昔も今もそれぞれ自國當代既往の言語の研究から發して漸く自國同系乃至所依の言語の研究に及んでゆき、それから一般的な原理や法則や方法やを生み出したと同じやうに、私たちも自國語を通して言語一般を透視し、それに由つて或は日本流の或は東洋式の言語學なるものを生み出したいと希望するものであるから、西洋言語學の啓發を受け其の學說に據りつゝも自國語に於ける觀察や反省や適應性の批判やを閑却することを戒めつゝ今日に至つた。かう考へ來たると、實は概論などと銘打つたものを著はすことは早計とも僭越とも思はれ、幾多の學徒が特殊研究と考證三昧とに耽り安全地帶を選んで立命してゐる態度が愈々尤だと思はれる。然し特

殊研究が概括研究を促がし、概括研究が特殊研究を導くのが學問進運の要諦たるべき筈であることは今更言ふ必要もなき所であつて、西は西、東は東、と安易な諦めをせずに、西說東論を檢討しつゝ一應の概論たる先進の西說の目安に由つて自覺自主以て東論を進めてゆくことは差支ないと信ずる。私の本稿の主眼とする所は、上述の如き意味での言語學概論序說である。

言語學史を通觀すると、古來いづこの國の言語學も先づ國語學から發達したことは多言を要しない。その國語學が同時に言語學になつたのは、その國に哲學があつたかなかつたかに由つてもきまり、又言語の哲學的見方が存在したか否かで定まる。ギリシヤ及びインドの如き哲學的思索に長じた古代文化民族に當該國語學を超越した所の言語學が生れたのは當然である。殊にギリシヤに於ては特殊の國語研究が顯はれてくる以前に、國語を通しての言語學が生れ、インドに於ては、言語哲學と對立して精緻な國語學が發達したのは、共に異數である。支那に於ては古くから哲學なきにあらずして而も國語學は、文字と音韻と語釋と語彙とに關して綿密な考察と廣汎な編輯とが行はれたりしたが、西說渡來以前に在つては言語學は無かつた。但しこゝでは國語學の意義をば當該國の言語の特殊研究の意義にとり、言語學の意義をば、當該國の言語に依る一般研究の意義すはなち哲學的研究なり比較乃至對照的研究なりの概括研究の意義に考へた上での論であることは申すまでもない。然し言語學の名をば、寬大に其の國の零細な言語の學問といふ意味に解すれば、國語學も亦其の國の言語の學問であるのだからそれは言語學に違ひないのだと言ふことが出來ないわけはない。かの意味に於て古代文化民族にはそれぞれ言語學が成立つたと言ひ得るのである。例へば日本に於ても、言語哲學はむろんなく、また言語一般を國語によつて見越した概括研究はなくとも、國語學と同義の言語學は存

したと云へる。支那に於ても此の意味に於ける言語學は存立したと云へるのであるが、畢竟するに日本と支那も國語學だけであつたのである。

然しその國語學の業績と價値とは、それは特殊研究の範圍內においてではあるが、決してギリシヤやロオマなどに比して見劣りがするわけではない。年代もちがふから時代錯誤に陥る嫌はあるけれども、十九世紀以前の歐洲諸國のそれぞれの國語學を日本や支那の國語學と對比して見ると、哲學的論理的根據の多少こそあれ、特殊研究の領域に於て或は編輯された業績に於て、東洋がはの實績は、むしろ勝れてゐる所があると思ふ。ドイツの言語學者ガベレンツが、どこまで日本の國語學上の實績を知悉して言つたかどうか怪しいのみならず、日本の學術史に關する彼れの智識のおぼつかなさを私たちは疑はないではないけれども、彼が我が國語學の卓越さを認識して居たことは注目に價する。然し其のガベレンツが韓愈の語を引用して支那の言語哲學を一言した點の如きは見當違ひである。ともかくも西域のインドとギリシヤ、又は歐洲のギリシヤとロオマ、それらに對して極東の支那と日本、東西それぞれ言語學の特徴なり長短なりの對映は著しく眼につく。卽ち極東和漢の國語學は、西域に於ける印度希臘の國語學が當該國語の特殊研究の域を超越して一般考察の域に進むべき根據を作つた哲學的基礎を缺いてゐた點だけは爭はれない。ロオマ時代及び近世以前の言語學乃至國語學は、ギリシヤの紹述と適用とにすぎざる程度のものであつて、近世における博言學的傾向といくらかの比較的方法とを除けば、これを大觀するにギリシヤに比して出藍のほまれを有するとは言はれない位なものである。ギリシヤの國語學は、初めは哲學者の研究の餘材にすぎざる觀をなすが、後代文獻學者の手に移つてからギリシヤ語法學の發生となり哲學者が遺した品詞論や音韻論とむすびついて西洋文典の組織となつて、百世の規準を構成して最近世における其の補充や反逆が現はれるに至るまで、永く世界の典型を作つてしまつたやうな偉大

な發展を遂げた。言語起源論や音義相關論や類推論や品詞分類法の如き一般言語學上の諸問題を別にして、ホメロスの古典の校勘や解釋などに始まつた文獻學的な考證學風が、言語哲學的な考察と相俟つて、互に論と證據との出し合ひとせりあひとで、論より證據、證據より論、とそれからそれへとしのぎを削つて、遂に語法學上の語形論品詞論文章論の構成を促がした始末は、國語の特殊研究と言語の一般研究との對立が圓滿に解決された古今獨歩の適例であつて、私たちが壯時ギリシヤの言語史を通讀して覺えず快哉を叫んだのも此の點に存した。印度系統の東洋言語學說の要素が十八九世紀の交に希臘系統の西洋言語學の停頓した狀態に新鮮な潑剌たる精神を鼓吹して、一方獨逸に發生した浪漫學派のいきいきした物の見方と國土民俗のうひうひしい資料の取扱ひとの兩面からの影響も手つだつて、印度傳統の語詞分析による比較語法學、日耳曼亞獨特の音韻變遷史、これらの新潮流が十九世紀初期の歐洲言語學界に起り、それらの比較的歷史的方法すなはち實證的な學風が新言語哲學とむすびついて、そこに新に言語學が更生したとも誕生したとも云はれる樣になつた。東西古今の國語學が歐洲の地に於て互に接觸し相合流し、一般言語學的乃至言語哲學的な考察と結びついたわけである。新言語學の主潮は、先づドイツの地に於て、一方には國語史あるひは同系諸民族語史すなはち廣汎な意義での國語史を發生せしめ、他方にはいはゆる印度歐羅巴同系諸言語の比較文典や語源集彙の編輯を促がした。從つて、デルブリュックが印歐言語學入門の舊版本の末尾に於て、言語學は今や哲學時代より史學時代に入つたと云ふ文句で、此の簡明な入門書を結んだが如く、比較的歷史的主潮が横溢して廣哲學的考察は背景に引込んだ趣が明かに認められた。例へばドイツに於て國語史學とも比較國語學とも言へば言へるのであつた。これはもちろん一般言語學に對してのことであるが、名は言語學と云つても、實は印歐系比較言語學が主であつて言はば僭稱であつた場合が最も多かつたのである。一般的綜合的な或は理論的な言語學は、フンボルト以後、シュタイン

タアル等の泰斗が出たにしても、とかく本流から遠ざけられがちであつた。それにした所がドイツの國語學でも比較言語學でも、部分部分の點についてでも決して一般理論的考察を忘却して居たのではなかつた。それはパウルが幾多の國語史考のほかに言語史の諸原理をめざしたのも、結果に於ては歐洲諸國における國語史の新研究を促がし、イギリスに於てすらスキイト其他に大きな感化を及ぼしたのみか、ヴントに於て言語の民族心理的考察を影響した點が相當に深かつたことは、其の自序に一言してある通りである。古くは英のスキイト、近くは佛のブリュノオ、これら二老家の如きも、やはり國語學より言語學に及んでゐるが、誠に言語研究の常道を歩いたものと言へるのである。古代は前述の如くであるが、近代に於ては、ライプニッツの創唱によつてドイツの國語乃至はゲルマニアの諸民族語の史的考察が進められて、外にはインド國語學の刺戟を受け、內には歐洲中世近世の國語史料を文書と方言との二方面から の蒐集や採訪に待ち、之を貫くに哲學的心理學的考察を施こした結果として、近世の歐洲に於ても國語學が言語學への第一階梯であつたことは當然の道であつた。比較言語學といへども堅實な國語學よりの寄與なくしては決して基礎が成立つたはずがない道理である。況んや廣く異邦殊域の古い言語の比較に依らずとも、狹い範圍內に於て、之を稍大きくすれば同分派の諸民族語を克明に比較するなり、之を小さくすれば一國內の方言土語をたんねんに比較するなり、材料の精緻さへあつたならば、方法の正確さへあつたならば、比較言語學は必ずしも大げさに古今東西の廣汎な範圍に涉らずともより正確に小規模ながらも成立ち得たであらうことは疑ない。これは遠く歐洲近時の方言研究の成果や方法を俟つて推論し得るまでもなく、尙更百年前の丁抹のラスクや獨逸のグリムを引張つて來るまでもなく、日本で手近かな柳田氏の蝸牛考にあらはれた如き成果と方法とを以ても容易に察知し得る所であらう。サンスクリットなどの智識を仰山に利用せずとも、アイスランドの島言葉などを土臺として北歐語やゲルマニア系の諸民族語の比

較によつてでも、比較文典や比較言語學は成立ち得たのであり實際或る程度まで成立ち、その本質に於てドイツに遜らざる學說をラスクの鄉土デンマアクに於て作り得たのである。かやうにイェスペルセンは其の言語學史の章に豪語したことがある。市河神保二氏の邦譯書によつても見られる如くである。然しこれは後世からの架空の理窟であつて、今日人々の依れる所の歐洲言語學の歷史が銘記するが如く、實際東洋よりインド言語學の感化があつたればこそ西洋の言語學は啓發されたのであるといふ事實は動かされないのである。サンスクリット文典の智慧を借らずしても、ラスクの力によつて比較言語學の鍵は與へられたに違ひなく、實際また微光は閃めいたのであるけれども、あれほど周到にあれほど停滯なく比較研究の業績が擧がつたのは、サンスクリット語の材料とサンスクリット語學の力であつたことは何と云つても爭へない。然しサンスクリット語學の惰力は今や强弩の末魯縞を穿たざるばかりに微弱になりつつあることも亦同樣に爭へない事實であつて、近代語學者としてのイェスペルセン、――國語學より英語學に及び、音聲學者より國際語唱道者に進み、スヰイトと共に言語比較學派を超絕して一般言語學の域に直入した其のイェスペルセンをして、毅然としてあゝいふ傲語を放たしめたのも、決して無理ではない。彼が單に言語學史上におけるドイツを貶して自國を揚げたいばかりに放つた放言だとは云はれない。

將來の言語學、日本の國語學者のがはから見る將來の言語學、それは私たちの理想として私たちの信念として有つべきであつて、その將來の言語學が、日本の舊い國學者系統の國語學、或は隣邦舊代の考證學者風の支那國語學、などから直接に進展して來ることは、今日に於てはもはや望むべからざる所である。全然西洋系統の國語學あるひは一般言語學の影響を直接にでも間接にでも受けずには殆んど新しい言語學が生れることは期待出來まいと思ふ。たゞ紹介的直譯的でなく祖述的應用的でなく、西洋系統の言語學說の咀嚼に基いて新國語學の創立と新言語學の提唱との望

ましいことは固より多言を要しない。むろん紹介や譯述や適用や進んでは換骨奪胎やも新しき我物を生む素材として道程として缺くべからざるものであるから一概にそれらを停止すべきではない。いはゆる他山の石として求むべきことは言ふまでもないが、期する所は出藍蟬脫にすぎないのである。私自身の不能を以てして云ふのではないけれども、それらの有益な仕事のほかに、新國語學の過程を經て新言語學への進展に向つてお互に努力したいと切望するばかりである。少くとも一般言語學と假想僭稱されてをさまつてゐる所の西洋言語學に對立してそれを批判する任務を帶びる東洋言語學の樹立を目指したいものである。これは日本の學人のほかには支那の學人その他西南亞細亞の文化國の學人に望むより外に仕方がない。印度の學人よりもむしろ極東の學人に期待したい。印歐文化國人や極度に歐化した非印歐人よりも當然歐化程度のまだ薄い極東人殊に日本人にそれを求めるのが至當であらう。これは西洋學說の否定ではなく批判を試みるのであり、排斥ではなくして對案を供するのであることは斷わるまでもない。先進の西說洋方を提案としテエゼとなし、之に對して對案を初めからアンチテエゼの意味としてではないが、從來の綜合のために檢討の料として出すのは研究の順序でもある。或は逆に東說和方の吟味のために西說洋方を持つてくるのが正當な順序だといふ見方もあらう。然し既出の分では東洋言語に關する東洋人獨自の理論なり見方なり研究法なりは何段か西洋に後れてゐる點が多いことは爭はれぬから、順逆の序は右の如くに相反しても致方ない筈である。既に古くから此の申さば自主的に一般的な批判的な言語學說の樹立を目ざして進んだ健氣な學徒のないわけではなかつた。國語學の上に言語學を日本人のがはから樹立しようと試みて既に一端を發表した仙臺の岡澤氏の如き勇健な學者もある。そのほか柳田氏の方言學の如き、折口氏の語原考の如き、いづれも強ちに西說に基かずして國語學上に一新生面を開いてゐる人も輩出した。[illegible]は廣汎な日本資料を驅使して犀利な洞察力によつて國語學上にも言語學上にも卓拔な成果を舉げ、

一は古言舊辭の解釋學上に鋭敏な直觀力を以て語原說明に啓示した所が多く、共に西洋系統の言語學說に據らざる點に於て稱揚すべき無比の業績を擧げてをる。從來の因襲的概念に拘泥することなくんば、國語學者言語學者とも云ふべき兩氏よりして學界は常に多大の啓發を受けつゝあることである。西洋流の考へ方でもつて押し進めてゆくと私たちは兩氏たちの協力をも得て段々國語學や言語學は、或は偏つたアカデミックな傾向乃至プロフェッショナルな臭味より蟬脫してゆくのではないかと思はれる。もちろん原理づけることや方法論めかしいものが、おのづからそれから生れて來ることもあらうし、兩氏からの新提案に對して一般的又は部分的の批判は多少免れないとしても、學問の本筋に對して兩氏の寄與する所は鮮くないと思ふ。

何處の國の國語學でも、初めは規範學的な見地から出發することが普通である。卽ち文語なり口語なりが多少頽廢し混雜して來ると、用語の正邪に對する尙古觀念或は標準意識が湧いて來る。發音の曲直といふことも考へに上つて來れば、語法の當否といふことも討議されずには濟まなくなつて來る。單に記載的や說明的でなく、言葉遣の正しさといふことを中心として、單語の採錄や正音の指摘や語句の矯正といふことが起つて來る。日本で云ふと、中古で和名抄のやうな辭書の編纂は、近世の東雅などと違つて說明的ではなくて規範的な態度すなはち國語標準の規定といふことが土臺になつてゐる。その點から見て和名抄は、新撰字鏡や以呂波字類抄や節用集などの全く記載的な辭書と違つて、國語學史上のみならず國語史學上に最も重要な著述だと思ふ。玉勝間に見える宣長の非難は別に成立つけれども、和名抄著者の規範的な態度は十分に尊重されねばならぬ。支那で云ふならば周公の作としてあるが實は孔子門下の編したらしい爾雅といふ分類辭書の如きも亦同樣に後代への影響絕大なる標準辭書であつて、この辭書が後世の釋

名や方言などの如き說明的また記述的な辭書と全然その揆を異にするのと和名抄の價値は正に髣髴してゐる。平安朝後期の歌學書に現はれた歌詞のあげつらひにしても、足利時代以後の連歌乃至俳諧の方式にみえる用語の吟味にしても、多くは規範的な見地から國語を檢討してある。たゞそこに哲學めいた理論がないと申してよいのである。假名遣の書は元よりのこと弖爾遠波の本でも、古い所はえて規範的に流れ易かつたのは當然である。それらの諸書は、もちろん規範的な態度から出發して取捨し選擇し、それに單純な記載的部分を加へ、且つ說明的な要素をも入れてあるが、期する所は言語上の規範でありノルムである。支那の韻書の如きも亦當然作詩上に規範を定める上から編輯されたのである。支那代々の韻書字書、近代では淸朝の康熙字典のたぐひも然うである。古代印度にあつても、綴字書發音書より語法書に至るまで、殊に嚴肅な規範的見地から多く作られたことは世界の言語學史上でも最も著名である。インドにおいて此の言語規律の觀念が同民族の言語信仰から促がされて嚴正な標準語學書が編まれるに至つたが、更に忠實精緻な記載的な國語調査が行はれ、進んでは音韻の組織立てやら語法の分析的說明やら語原の解剖やらが施こされ、西曆紀元前數百年の古きに在つて、遠くギリシヤの言語硏究を凌駕した。且つ又延いては支那の音韻學を起こし日本の言語硏究に偉大な影響を及ぼしたのみならず、又西方に轉じては近世比較言語學の發生に貢獻した。その次第は上に略述した如くである。ギリシヤにあつても、哲人の言語硏究は、言語表現の正當性といふ點に關する一般問題の討究にも涉らざるを得なかつたのであるが、審美養正を念としたギリシヤ人の常として國語の美しさ正しさと云ふことに關して聰敏ならぬわけはなかつた。よしやインドに及ばざること遠しとしても、發音の練習や音韻の分類には格段意を盡くしたものである。彼等ヘラス人はやはり國語の美を發揮し正を維持するに努め、方言と標準語との間の嚴正な意識を具へた。言語哲學と古典文獻學とから起つたギリシヤの語法學の如きも、智的な說明的な要素は豐かであつ

たが、それが修辭學と相俟つて國語の實際的な訓練と陶冶とに資せられたことは當然である。インドの言語研究が言語信仰に胚胎するが如く、ギリシヤの言語學習は主として言語美の宣揚から促がされてゐるが、インドの文典が語詞分析に長じてゐるに對して、ギリシヤの語法學は專ら語詞の綜合的方面を取扱ふ文章論に於て優越してゐた。音韻研究に至つては、ギリシヤは到底インドの敵ではないが、文章論に於て格段の卓越を見たのは、一つにはギリシヤ人の言語陶冶が與かつて力があると考へられる。かくの如くして、ギリシヤ末期の大文典は次第に規範化せられて教科文典の形式を帶びるやうになつたことインドと同樣であつたが、ロオマに傳はるに至つてラテン語の規範文典が編まれて次第に中世近世と、文典によつて國語が訓練を受け陶冶を與へられるやうになつた。むろん生々たる言語の活動は、さういふ拘束に從つて甘んじてゐたわけはないが、然し講說作文共に文典の軌範に則る所が多大であつた。從つて實際の言文と規範文典とが、相依り相佐けつゝ進んだことは、インド程ではなくとも、日本などの比ではなかつた。その點からいふと作歌などの上にこそ日本ではかなりの束縛があつたけれども一般の言語殊に口語に於ては規範文典の制御を受けなかつた爲めに自由放埒な儘に進んでしまつたのである。明治以後の規範文典殊に教科文典の力を以てして輙く國語の言文に對する拘束力の微弱なる所以の原因の一つは明治以前に規範文典の組織が存在しなかつたこと、江戸時代國語教育が學校に於て行はれなかつたのにも由るのである。

かくの如く國語の規範的研究態度が、古來それぞれの國語學史上に如何なる程度まで又如何なる部分まで現はれてゐたかと云ふことが、その國々に於ける國語愛護の精神と結びついて、近代および現代における國語運動や國語政策や尙又國語調査の事業にも影響してゐる。國民精神の動向とも關係する筈であるが、古代においては言語信仰の萌芽ともいふべき言靈の古義や、近世においては言語哲學の初步とも見られる音義觀すなはち信仰を離れて說明に陥つた

所の言靈の新義や、これかれの素因を有しながらも、遂に言語信仰が發展せず言語哲學が生誕せずにしまつたのは、日本の宗教や哲學では、止むを得なかつたわけである。從つて十分な國語愛の精神の現はれを見ず、眼に見えて國語愛護の運動が起らずして明治時代に入つてしまつた。國學者の言議と論著との裡にさういふ愛著の念が現はれないのではなかつたけれども、近世におけるイタリヤを始め、フランスやドイツに於ける言語の改善を主とした學院や協會の組織を見ずにしまつたのも今さら致し方ない。日本が後ればせにフランスのアカデミイの如き機關の設立を夢想したところでそれは徒勞である。少くともかういふ時勢になつては止んぬる哉であらう。言文に對する規範觀念の缺乏は、例へば近年の外來語の横流や新語の濫造や粗雜生硬な語句の流行やの場合に於て、之を言語生活の實際から靜觀せずに、規範的態度の史的考察を以て見るときは、私たちは其の由つて來ること遠きことを一顧せざるを得ない。國語の規範觀念は、やがて國語の調査や說明の發生を促がし、文典や辭典の完全なる編纂を進めてもゆく。斯道の學者や少數の先覺者の背後に專門外の人々や多數の國民の支持があるとないとでは、調査や編纂の事業の進捗が量的にも質的にも大に違ふ。一般的に國語の愛護といふばかりでなく、一個一個の單語の正しさ美しさ、その由緒に於てその連想に於てその諧調に於ての正しさ美しさを愛重する精神が、或は國語の調査者それ自身において缺けて居るとするならば、國語の愛護も規範もあつたものでなく、それは單純な愛國主義排外主義の發現にすぎず、現代の功利主義能率主義の産物に異ならざるものであらう。ともかくも愛重の精神と規律の精神とからして、各國に於て古來種々な形において國語の調査や研究を促がしてゐることは事實であり、その精神の强弱氣魄の厚薄が國語學の上に影響するところ多大であることは多說の要を見ない。明治以前にあつては、眞淵宣長等の諸先輩の國語學說、明治以後においては近くは仙臺の山田孝雄氏等の國語學の如きに於て私たちは上述の精神氣魄の表現を見るやうに思ふ。明治後期の新

國語學の基を肇めた上田萬年氏の壯期の名著として知られる『國語のため』の一書の如きも國語の運動と教育と調査とを促がした點に於ては劃期的な大論文集であると云へる。

明治以後の國語運動がその末端に於て動もすれば淺薄なる功利主義と輕率なる便宜主義とに墮したことは遺憾のわざであつて、元より國語愛重の意氣を缺いてをることは言ふまでもないが、とかく歐米の綴字改良運動の皮相を模倣して、それらの運動の歷史的根柢を洞見しなかつたり或はそれぞれの國語史に通曉しなかつたりした缺點が多かつたやうである。むろんイェスペルセンの如き現代の進步的言語學者が、人道主義の上から、自國の國語學の上に立脚し歐洲の現代外國語學史に通達し兼ねて一般言語學說を創唱して、その理想主義實際主義の立場より言語の改善に意を注ぎ國際語の支持と其の新案とに傾注したりして餘力をその實現に努めつゝある樣な勇猛不退轉は、賞揚すべきであるけれども、而も氏すら往々にして脫逸の難なきにしもあらず、それはそれとしても、氏の所說はとにかく歐土における言語學および各自の國語學を硏鑽した餘りのことであるから、根據もあり首肯もされる所が多いのである。然るに、本邦に於ける西洋言語學並びに音聲學の祖述者の所說は、輸入當初より往々直ちに國語運動の所依の原則として之が輕率に用ゐられた嫌ひがないでもなかつた。西洋の言語學や音聲學が直接に諸種の國語改良の指導原理を與へるが如き觀を呈したことが屢々あつた。西洋言語學が國語の新硏究を促がした功績も少からずあつたことを私たちは認めるけれども、ともすれば利用厚生的に能率本位的に言語學が使はれたやうな場合がなかつたとは云はれない。尙後に述べるが如く、言語學が日本の國語硏究の上に益したよりも、比較言語學の皮相が傳はつて國語と他國語との無造作な比較硏究を促がし、比較すべき相互の國語の當該國語學の硏究を忽諸に附したやうな方法論上の誤謬が頻繁に犯されたのも事實である。然しそれよりも、むしろ西洋の言語學の一面が、西洋の語法學と同じく、一種の規範的な指

導原理を與へるものだと誤解されて、國語運動者や調査者の味方に使はれたやうな誤りを免れなかつたが、其の方の一種の過失は到底掩ふべからざるものがあつた。何事にも功過の並存は止むを得ない。然しそれらの幼稚時代に比べると、近年のロオマ字問題に關して西洋の言語學説を利用する人々は、回顧すればさすがに進歩の蹟があるものだと思はしめて慶ばしく感ぜられるのである。他方に於て歐米の言語學界および音聲學界に於てもフォネチックスとフォノロヂイとの境界に關して、卽ち自然科學的な音聲學と各國の特殊國語學上の音韻學との區分に關して、段々聰明な考慮がめぐらされて來たから、日本のロオマ字問題についても從來の如き寫音主義一方で押し通す様な意見のみが行はれなくなつた。音博士袁晋卿を追憶せしめるパアマア氏や仙臺の菊澤氏の著述の如き、最も好くこのがはの研究をつくしてある。

規範的な立場から取扱つてある國語學上の領域には、國語の規範文典殊に教科文典がある。日本の文典は、主として明治初年に導き入れられた英文典の上に立脚してゐるのであるが、遡れば、維新前後或は幕府晩期の和蘭文典の影響を被むつてゐる部分もないではない。また遠く遡れば、ラテン文典の適用が根柢をなす所の吉利支丹系統の日本文典が少しばかり現はれたこともある。然しそれらの南蠻系とも紅毛系とも名づけられる所の日本文典又はその素材は、要するに語學的な記載的なものにすぎなかつた。之に反して明治初代このかたの英文典系統の國文典になると、それは規範的威力を國語界に有することが、段々加はつて來て、明治二十年代になつて國語に對する自覺心が先覺者の鼓吹によつて起つて來て、古典國語の教育が普及するやうになつて以來と云ふものは、西洋文典適用の痕跡の著しい教科用國文典の編纂が續々行はれて來た。從つて文典といふと、とかく主規範的なものとなり、非記載的な、故らに取

捨を施こした、便宜主義的な、歴擇的な形の、文典に墮する傾きが强かつた。各國の國文典には、各時代的な文典もあれば、超時代的な文典もある。歴時代的な歴史文典もあり、更に一國語の域を超えては各々の國語や民族語やを比較して遡源的な研究を進めてゆく所のいはゆる比較文典もあり、一國語の範圍内においての諸方言の比較文典といふものも成立ち得る。これらの外に上に、高く規範文典が存在し、多少の變形を經て、それが當該國語界に於て教科文典として學校文典として役立ち、外國人に向つては語學用の文典にも用ゐられる。歴時代的な歴史文典は、本邦に於ては、未だまとまつた形のものを見ないけれども、時代的なものには山田氏の奈良朝文法史や平安朝文法史のやうな名著があり、一部分的のものでは、同氏の平家物語の語法に關する研究や、湯澤氏の足利時代の口語誌がある。これらの語法史むしろ語法誌はもちろん記載的を主とし時に因果的關係の說明をも與へてあることはあるが、記載的な態度に出てゐることは當然である。大槻氏の文語口語の兩文典ともに、間々歴史的說明が附載されてはゐるものの、要するに規範的態度を主とし、時代的といへば平安朝の語法を根柢にはしてゐるが、同代の言語相の記載を主としたものではなかつた。外人のものでは、英人の國語研究が最も好く出來てをり、又最も日本人の國語研究に資してあることは周知の事實であるが、その中でも、アストン及びチャンバレン二氏の研究に最も見るべきものがあり、殊に後者の口語文典は、あらゆる歐米人が日本の文典について著はしたものの中で、日本人の國語性を最もよく體得してある良著だと思ふ。それは明治中期の國語の記載的な時代文典として随一なものである。歴史的文典と稱するものに近年の英國大使館のサンソム氏の著述があるけれども、嚴重な意義における歴史的文典とはいへない。どうしても統轄的な文典は、超時代的な、非歴史的なものになり易く、又それから理論的な文典が生じ、規範文典のみならず一般に文典の理論的根據を形作る。山田氏の大著として聞こえる日本文法論の如きは、從來の日本の國語學の生んだ高級の產

物となすに足らう。之に反して古く十八世紀のフランス等に存在したグランメエル・ジェネラアル即ち一般文典あるひは普遍文典のたぐひのものは、僭越ではあつても普遍適用性をねらつた點に於て一般言語學に向つて進出したものである。一國語の理論文典の上に、一般文法の可能性は私たちも認めないわけにはゆかない。京城の小林英夫氏の近著によつて其の理論は十分に闡明されてをる。國文法本論の要部要部に於ては、徳川時代以降、先進諸家の所論と明治以降新進文法學者の考究とが出てゐて、或は記載的論證的であつたり或は超時代的非歷史的であつたり或は規範學的でもあつた。對照的研究の典型としては最近大阪の細江逸記氏の良著があり、前記の小林氏の著述と双絶であるが、將來の國語文典の理想を暗示するものとして學界の注目すべきものだと思ふ。よしやそれが英語を主にしたものとしても、一般文法學上の研究として我が國語の語法研究に資する所多大なることは、信じて疑はざる所である。

規範的態度は、日本の方言調査に對する一部國語教育者の態度に於ても認められる。方言を調査して標準語制定に資すべきことは、初期の國語調査委員會に於て明治三十五年に宣言した綱領の一つであつて、規範制定の權威を期する所の此の種の國家の機關が先づ以て周到な調査を施こし記載的な事業を行ふことは、當然な徑路であつた。從つて音韻と口語法との調査に關して各地に向つて資料を徵するといふ方法が採られて進行し、その結果が、音韻調査書口語法調査書の二種となり、又二種の色分け附圖數十葉となつて出版された。語彙の調査に及ばなかつたのは大に遺憾としたのみならず、音韻及び語法に關してでも、通信徵集法によつて實地探訪によらなかつた爲め、種々の點で材料の不統一を來たし且つ結果に於て多少の不安を有せざるを得ざる趣がある。語彙を主とした調査を怠つた結果として語彙の分布地圖を遺さなかつたことは、後年に出版されたフランスの言語地圖に對して格段の懸隔を生ずるに至つた

ことは、亦止むを得ない。

それはそれとして、方言の調査あるひは採集といふ事業が、その方法の如何に拘はらず、また個人によると團體によるとに拘はらず、その目的が方言を滅ぼして標準語を制定するためであるといふ規範的態度に出でたとするならば、それは言語生活を無視した仕方であつて、國語教育の立案者が國語教授の實際家が、方言と標準語との對立を知り差別を認めること、標準語の運用を奬勵すること、それらはむろん正當な事柄であるけれども、もし故意に方言を滅ぼすといふ方針意圖があるとすれば、それは無法な無謀な考だと申すの外ないのである。國語の歴史的研究に參照するため、又文獻的研究の結果を補充するため、方言の採集乃至研究が重要性を有するばかりではない。方言こそは實際に國語が生活してゐる所の實相を言語相を示してゐるものであり、國語生活の源泉をもなすのであるから、個々の單語の良否、個々の語法の適否、個々の發音の正否、といふことでなく、全體として方言生活こそは人々の言語生活の根柢であると云ふことに着眼して、私たちは方言を調査すべきである。これは訛言訛音を奬勵するといふ意味ではない。たゞ訛言訛音を矯正するといふ建前から出發するのでなくして、卽ち眞向から規範的態度を振りかざして方言に當るのではなく、忠實に採集し又その生活を在り體に觀察すべきだといふのである。規範的立場からのみ方言を觀察せずに、卽ち方言は初めから又はそれ自體が轉訛であるといふ考をするのは元來誤りである。卽ち支那風の考で雅に邇しといふ爾雅觀念にとらはれてはならない。方言は邪、雅言すなはち一時代の標準語は正、といふ風に豫斷するのは、規範的見方である。然し事實に卽して靜觀してゆくと、卽ち歴史的に觀て、言語生活上から觀るとなると、正も邪もない。先後の關係から、すなはち歴史的に見るならば、古來幾多の學者が旣に說いたが如く、單に方言に古語が殘るばかりでなく、方言の方が古語の正統である場合が少くない。それのみか、古來の文獻に殘る國語は、その實は、

各時代の言語の一少部分、九牛の一毛にしか當らない一少部分にすぎないわけであるから、今日の方言と古代又は或一時代の方言との關係は、沒交渉な場合、因緣がつけられぬ場合、歴史的先後の關係を言へない場合、がかなり多いと見なければならない。時代時代の交通關係等からして一概には云はれないが、少くとも交通の行屆かなかつた舊時代にあつては、方言は多くアウトノミイであつた、多く自治的であつた、主として無制御であつた、卽ちそれ自體の生活をしたことが、後世に比して、現代に比して、强盛であつた。故に國語教育の建前より正邪の念を以て臨むことは差支ないにしても、國語學者言語學者の立場よりは、言語生活の眞相をつかむためには、或は歴史的の資料を獲るためには、態度を更へなければならない。むろん學問最高の目的は、規範を立つるに在つて、智識を求むるのは、むしろその階梯を得るに過ぎないといふ理想主義を是認したところで、如上の見解は成立つのである。況んや鄕土愛の精神よりしても、鄕土藝術の愛護よりしても、方言の愛重といふことは考ふべきである。又往々新標準語の源泉を古語や文學語やのみならず方言に求めるといふことも考へてよいことである。卽ち一種の規範的態度からも方言の抱擁は是認さるべきである。要するに、方言の採集調査は、規範的な國語教育者の立場のほかに、單純な記載的な目的のものもあり、比較言語學的なものがあり、言語史的なものがあり、いろいろあるわけである。

槪言するに、言語研究が規範的に傾くといふのは、智識的に偏するよりも、傾向としては正當で又止むを得ないものと思ふ。一國語の標準文典にしても標準辭書にしても、それが多かれ少かれ記載的な部分や說明的な要素を含有してゐたにしろ、第一義としては、その國の國民精神の培養に資するのにある筈だから、調査や研究がこの第一義に向つて傾いてゆくのは自然である。後ればせながら、明治の中期に、加藤弘之氏が明治十年代の末と思ふが、學士院に

向つて博言學すなはち今の名でいふ言語學の振興を進言したのも、その後十數年して文部省に於て同氏が委員長になつて設立された國語調査委員會の主旨も、共に直接に國語規範の制定を目ざしたのであつた。チャンバレン氏が博言學や國語學を東京の文科大學で講義したり、文部省の旨を受けて教科的な日本小文典を編んだのも、明治初年に文部省內に於て時の國語學老大家が語彙の編纂を創めたのも、よしや其の一少部分が出版されただけでも國家の事業としては、規範的態度から出たものであつたことは爭へない。是に於てか、後時まで直接功利主義的な色彩が國語事業の上にも濃厚であつてもそれは致方がない。既述の如くフランスのアカデミイ設立の主旨でも爾來の國語政策でも、規範的態度が第一義をなしてをるのと、それは大體同じである。たゞ國語を愛護するといふ一般人の精神、殊に文學者の精神、それがフランスには旺盛であり普及し一貫してゐる樣であるのが大にちがふ。機關の立案者にしても經營者にしても指導者にしても從業者にしても循奉者にしても、國語に對する審美的精神の有るのと無いのと、大にちがふ。それが無ければ、アメリカ式の能率主義に墮してしまつて、規範は單に淺薄な功利主義からのみ出てくるのを免れない。昨今の時勢も非なれば、元來の精神も好くない。若し國語の調査といふことが、單に國語の敎育を眼前便利にするといふ爲であつて、文藝とも絕緣し、言語は言語、文藝は文藝、と互に離れればなれに考へて、日用の言語は日用の言語、特別の言語は特別の言語、といふやうに截然隔離してしまふやうな態度で、前者さへ便利にすればよろしく、後者は國語敎育者は我不關とするやうな、淺薄な功利主義に基いて國語政策を立てたなら、國語の向上は決して出來るものではない。明治時代少くとも其の初期の先覺者は、英米の功利主義に動かされてさういふ根柢を築いてしまつたとも見ることが出來よう。

翻つて顧みると、ギリシヤ語で言語學をフィロロギアと云つたが、そのフィロロギアの原義は、言語愛といふ意味であつた。丁度フィロソフィアすなはち哲學の原語の本義が智識愛といふ意味であつたと同樣である。フィロといふギリシヤ語の語幹は、轉音のフィレが主として動詞の語幹となつてゐるのと共に、親愛・友愛の義をもつ。ロギアの語根は、ロゴスの語幹ロゴ等と同じく、言語の義であり、こと又ことばの意を成す。動詞の不定形レゲインのレゲもその轉音である。國語で宣言・宣告の意をもつノルといふ語がある。琉球語のノロは、宗教的意義を有し、神意を傳ふる巫者すなはち祝の意になつて固定してをるが、日本のノリトのノリも同義であり、宣命の宣も同樣であること等は多說を要しまい。ノリトのトは語音の義であるオト（音）が語原であらう。物のオト・物のネ・古くは人物にも生物にも用ゐられた。オトナフ・オトヅルのオトの語頭母音を攝略したのがノリトのトであらう。戰爭の時の告知をなすノロシのノロも後世の方言から發生した文獻上の新語であるが由緒は古い。そのノリが神言とも聖語とも勅語ともなり、從つて權威ある言語となつて、それが法となり理となり道となること、ギリシヤ語のロゴスと同じである。それが哲學のロゴスともなり新約聖書約翰傳などのロゴスの意味ともなる。さてそれらのロゴスの本義たる物言ひを愛するところから、フィロロギアすなはち愛言また言語愛が生れて來、それを專らとせる人がフィロロゴスすなはち愛言者でありまた言語の愛者であつた。愛より學にすゝみ、愛より習におよぶ。愛すればこそ學びもすれば識りもしたくなる。愛が本である。さればフィロロギアといふ語の語原は尊い命名から生れたのである。そのフィロロギアがラテン語の同形からして、直接にも傳はりもしたらうが、フランス語を經て間接にドイツ語やイギリス語に及んで、之を英語から日本に輸入した。そのフィロロヂイが博言學と譯され後にそれが言語學の名に改定せられた。その名は加藤氏の建議から權威づけられて、後にそれが東京の文科大學の專門學科名としてまた專攻學科名として博言學科とし

て行はれた。その名は私が卒業した翌年の明治三十三年から言語學および言語學科と改名された。尤も英語のサイエンス・オヴ・ラングヰヂとか獨語のシュプラハヴィッセンシャフトといふ名からは、言語學といふ名が直譯的にも其儘該當して良いのであつたけれども、博言學といふ名が、英語のフィロロヂイの譯語に宛てられた。又博く言語を或は比較し或は對照して研究するといふ様な意味で、先輩が博言學とつけたのでもあらう。處が博といふ名は、博覽博識などの名と共に、又別に博物學といふ類名もあるが、何となくポリグロットを作る學術あるひは幾多のいはゆる語學を兼修する所の學問といふやうな誤解もつき易かつた爲に、私たちの時代の師徒の提議によつて改名が行はれたのである。古今東西内外の言語の比較や對照を試みるといふ上から見ると、とにかく博く言語を學び究めることは必要であるから、その名は強ち擯斥するには當らなかつたわけであるが、學問の名稱としては、當然博といふ事は學に入る必須な條件だから、無くとも可なるわけである。假りに名づけて云はゞ云はれるポリグロッチックスといふ稱呼こそは博言學といふ譯名を償するであらう。さてフィロロギアといふギリシヤ語は、原義は言語愛であつたけれども、哲學者が夙にその國語をあげつらひ取りあつかひつゝあつた時代から、古典學者が專門的にギリシヤの古典を蒐集し校勘して古言を研究する時代に入るに及んでからは、フィロロギアは、古典の研究・古典學の義に轉じてしまつた。ギリシヤの古文獻の研究の意味になつた。日本の國學者や古典學者も此の意味においてやはりフィロロゴスと呼んでもよいのである。支那に於ても漢代より清朝にいたるまで、今の民國時代に於ても、かういふフィロロギアがたえず存在した。和漢共にいろいろの名前を以て呼ばれた。廣くは國學とも古典學とも又部分的には校勘學とも註疏家とも考證學とも言はれたのがフィロロギアに當る。近世歐洲の學界に於て、卽ち文藝復興の後に方つて所謂人文學派などと云ふ學徒があちこちで輩出してギリシヤ及びラテンの古典の考究をして以來、古典的言語學、英のフィロロヂイ佛の

フィロロジイ獨のフィロロギイ、いづこでも古風な末期希臘のフィロロギア風の研究を脱しなかつた。十八世紀末代より一方には博言學風を生じ他方には浪漫主潮から來た中世近世當代の舊辭方語の蒐集と考證とが始まつてからは、尚更フィロロギアは、古希臘拉丁のを主材とした語學的研究に固定せざるを得なくなつた。用語例の上から見ると、フィロロギイ又フィロロジイの名稱は獨佛に於ては古風な意味を墨守し、十九世紀の晩期に近代語學運動が起つてからは、ネオフィロロギイの名さへ起り或は新しいフィロロギイの稱呼さへ出來たけれども、英國においてはフィロロヂイの名は、必ずしも舊風に泥まずに一般的な意味での言語學のことを指すやうに進んだ。然し舊式な意味での名も決して使用を絕つたわけではなかつた。されば獨逸語のフィロロギイを直に言語學と譯するのは、往々人が卒然と書いてはをるが、それは內容が相違してゐるのである。英國でもサイエンス・オヴ・ラングヰヂ卽ち言語の科學をば、フィロロヂイと同じく用ゐたことは、十九世紀晩期の著述にはよく見かけたが、それも近年はなくなつた。稍以前にヂャイルズの著書の如く西洋の古典的言語學の意味で用ゐた例も英國にある。之に反して獨逸ではシュプラハヴィッセンシャフト卽ち言語科學の意でフィロロギイの名を用ゐた例は殆ど見かけない。フィロロギイの意義については、獨逸の諸學者の論述があり、日本に於ても旣に講述や著述に於て新代の人々が折々紹介し啓蒙してをる。例へば昨年京城の中島文雄氏の『英語學とは何か』と題する小册子に、言語學とフィロロギイとの關係等フィロロギイに關する重要なる問題が懇切に論究してある。

　フィロロギイを文獻學と譯出したのは、上田敏氏であつて、それを日本の國學などと對比して講述によつて之を本邦の國文國語の研究界にひろげたのは芳賀矢一氏であつた。これらは私の先年一言した所であるが、抑も文獻といふ熟字は論語に起り和漢共に古來之を用ゐ來たつたのであるが、元來その熟語の二字のうち、文は文書、書き取られた

もの、獻は賢であつて卽ち賢者たる物識りが記憶してゐる所のもの、を指したのである。書きつたへと言ひつたへとの二種である。書傳と口傳、記載と口承、その二つである。廣く記錄と口碑とを云つたものである。されば本義に於ては、文獻といへば、古典古文書、いはゞ今日通用の意義での新古の文獻のほかに、口々に傳はつた所の民謠や傳說のたぐひより方言や言草にいたるまで、一切口承口傳そのものを主とし、或はそれらを新に採集筆錄したものをも込めて、口文兩方に涉つて稱したものであるが、然るに其の口承を新しく筆錄したものはもはや文となるわけだから、旣載未載のけぢめを逸して新舊一切の載錄物筆記物を、むろん印刷物をも含めて、文獻といふやうになつてしまつたのは自然の勢である。支那でも次第にさう傾いて來たのであるが、近年の日本にあつては、尙更その熟語が大正以來濫用されて今日に至つてゐる。それは用字の話であるが、その文獻學といふ名は、ドイツのフィロロギイの內容をもつて、日本に在つて少くとも言語の學界には行はれてゐた。されば嘗て和辻氏が提唱されたかと思ふが、文學が文の學であつて文の藝でないから、現代のやうに新舊の文藝そのものが文學といふ名を冒し、その文學を研究する所の學問がまた何文學と稱せられる樣な撞著を起こしてゐるのは、注意すべき事柄である。言はば文學の學とか文藝の學とかいふべき所も、文藝の創作又は作品そのものをも文學といふ。國文學とか英文學とかいふ類である。その國の文學であるのか、その國の詩文の學問であるのか、兩樣を兼ねていひならはしてをる。國文學者といふと、日本の國文の研究者であつて、日本の國文の創作者ではない。英文學者と云へば尙更である。されば創作に卽いては文藝といひ、それに對して研究に卽いては文學といふ方が、哲學といふをりの學、史學といふをりの學、それらの學に對して類推的に正に匹敵するわけである。文の學すなはち文藝の學、哲の學すなはち智の學、史の學すなはち歷史の學、かう三者が對立するわけになる。

然る所、學の文字が、學問の研究といふことと、學修や練習といふこととの二義を有つ所から、混同をひきおこし易い。マナブことはマネブ、卽ちマネスルこと、まづ模倣することである。ヲサムルこと、我物と御すること、マスタアすることの前に、まづマネブことがある。マネブことはツクルこととは違ふけれども、受け入れて後に我物として再現する働きをなす上に於て、ツクルことにもなる。創作ではなくとも一種言からの作出である。そこでマネブことよりマナブことに及び更に體得してキハムルことに進んでゆく。語學といふ場合の學も、文學といふ場合の學と同じく、言語をマネビ或はマナブことからヲサメたりキハメたりする意味になつてゆく。文藝の道の方は、今日の過程に於ては、作ることと究むることと分離してゐる。創作と研究とは別々な仕事となつてゐる。然し古い所へゆくだけ、知行は合一してあらはれてゐるから、學といふ文字は、とかく學修體得と學問研究との混同を招き易い。語學といふ場合でも、今日は外國の言葉をマネビヲサメル方の運用的方面すなはち讀み書き話しを能くする所の方面のわざをいふことになつてをる。語學は語の學問的研究、言語の學問的研究といふ意ではない。模倣や運用や、或は又解釋や作文や、すべて行に屬する方面と、研究や學問や、或は又分析や批判や、すべて知に屬する方面と、それらの實行と知識とは、哲學と史學との場合よりも、文學と語學との場合に於て、合一し易く分離し難いのは事實である。況んや因襲によつて立つ所の言語生活界に於ては、合理的な造語は出來かねるから、語學といふ名義が、ともすれば言語學といふ名稱と混同される憂が多かつたが如く、文學といふ名がとかくに兩義に渉るのを免れがたくなつて、この陋習がぬけきらずにゐるのは仕方がないけれども遺憾である。文學を文藝學とか文獻學とかの意味に專用することが大に困難であるに反して、語學と言語學とは、一は實行に卽し他は研究に屬するといふ樣に分けて考へられる傾向がある。文學學といふやうに學の字を二つ重ねることの更に拙劣なるは言ふまでもない。語學は畢竟するに外國の語を學習す

るの義に固まつてしまつた。語學の研究、文學の研究、といふやうな重複した言ひざまも自然起つて來るのは止むを得ない。

さて言語學と語學との限界、すなはち知行の境目、それに關する重要な問題がこゝに提起されねばならぬ。それは博言的なることと言語學との關係である。言語學者の第一資格が博言家であるべきことか否かと云ふ問題である。言ひかへれば、いはゆる語學力の豐富なことが、言語學に到達する第一要件なりや否やと云ふことである。答へは否とも然りとも兩様に云はねばならぬ。こゝで語學といふのはむろん若干數の外國語學のこと、通俗の意味にては西洋の近代語學のことであるが、進んでは西洋の古代語學、更に進めばサンスクリット語とかペルシヤ語とかアラビヤ語とかヘブライ語とかの一二或は二三、多々益々辨ずる意味で、若干の語學力を具備することを以て、言語學への第一條件とすべきや否やといふ疑問があるとする。少しでも多く、而して少しでも深く周到に透徹し、少しでも新古に渉つて通曉してゐればゐるだけそれだけ、「言語」そのものに對して理解洞察の力が完全になる道理であるけれども、それは單に博言的に運用が出來るといふだけで可いのではない。博言によつて「言語」を知ること、博言を行なつて「言語」を知るといふことが肝要なのである。たゞ博言そのことが「言語」の學問にはならないのである。同系言語の比較研究はもちろん、或場合の同系異系の言語の歴史的研究にしてもそれらの對照的研究にしても、博言的なことは、重要なことである。まして世界言語の系圖的分類をはじめ形態的分類になると、深く博言的なればなるだけ、言語分類學は完全に近くなる道理である。然し人間の能力には一定の限りがある。俗に博言家といひ、西東今古の某々言語若干を操縱する稀有の才能を有する博言家といふ者にしても、或は歐洲の新舊幾多の知名な言語分類學者の博言集に

しても、自身の國語、その所屬の近邇國語、同系または隣接地の外國語、それらの多少の國語・民族語を除くと、その餘に關しては信憑すべき點が段々薄くなつてゆく、不安さが段々多くなつてゆく。古くは十九世紀後期における獨のフリイドリッヒ・ミュラアにしても、二十世紀初期以來の獨のフィンク、墺のシュミット、佛のメイエ、彼らが一人の綜合にしてなら尙更のこと、よしや若干人の分擔にしても、例へば日本語や朝鮮語や支那語やアイヌ語になると、所依の取材は古く、理解力は淺い。比較言語學者のがはでは、例へば歐洲のウラルアルタイ言語學者の一々の素材といひ史的考察といひ、極東語の方面から見ると、覺束ない所が少くない。西洋語に緣の薄い言語になればなるだけ、その成果はわるい。西眼を以て見るのは致方ないとしても、卽ち西洋流の言語意識を以て觀察するのは容るすとしても、それぞれの東洋語の言語精神を把握してをらず又史的考察は缺如してゐる。さういふ止むを得ざる事情からして、言語分類學にしても、或系統の比較言語學にしても、透徹した硏究に達して居ない。これは斯の學問の性質上恕すべきことであるにちがひない。他國の言語また他民族の言語を領得することは、他の國民や他の民族の精神を領得することである。現代他國語にしても當該他國民の言語精神をつかんで、當該他國民の心持とほゞ同樣なることは容易に望み得られない。知識的に知るのでなく、言語生活を味得すると云ふことは、容易な業ではない。たゞの語學力たゞの博言力、一とほり現代他國語を運用するといふのと、それとは筋が違ふ。尤もかういふ着眼は理想的な着眼であるのだから、その理想にいくらかでも近づけば近づくだけそれで結果が正しい、成績が信ぜられると前以て考へておいた方が賢明である。この論法で押し進んでゆくと、知りて行ひ、行ひて知る、知と行とが互に相並進する以上は、自分の國語の硏究が一ばん安全であるといふことになる、卽ち正確を期待される道理である。現代にあつては現代の言語精神を有し、古今を通じては國語の精神をつかみ、ソッスュウルのいはゆる同時的の見方にしても異時的の見方に

しても、――小林氏の譯語に從へば共時と通時――いづれも能く完全に言語意識を有し得る。同時代にあつては觀察も實驗も反省も出來る上に逆視的又倒敍的に過去の言語の徵證も得易く、文獻の檢討驅使が比較的安全に出來易い。知新に由つて溫古が或る程度まで可能である。これは何處の國に於ても當該國語の國語學が最も完全に進み得る可能性があるわけを示す。他國語に對する認識不足は止むを得ないとして或は諦めて然るべきであらう。然し現實は現實として、理想上はさう諦めては濟まされないから、益々認識を深く且つ廣くしてゆく要がある。自己の國語を通して言語を觀るのを第一義として進みつゝも、他國語の正しい認識によつて、對照法と比較法とに由つて、自己の國語を見直したり判定したりしてゆくのが、國語學の向上になり、やがて言語學への接近になる。又それは言語學進步の過程としても正當である。國語學卽言語學たりしインド人やギリシャ人の觀念は、今なほ循奉してもよいと思ふ。もし現代の日本人の有つ哲學觀と國語の經驗的な研究の結果とが結びついて、そこから日本の新國語學を通して日本人の立てた言語學がおのづから生れるとするならば、所依の日本哲學がよしや固有のものでなくとも、歐米の言語學の日本語への適用よりも遙に勝しなものであらう。日本の國語學の基礎の上に立つた日本の言語學がおのづと生れさへすればよいと思ふ。私たちは現代の日本哲學者に期待する所が尠少でない。

博言學を言語學だと解する見方に對して、比較言語學を、その中でも特に印歐比較言語學を、言語學の全部か要部かと解する見方も、日本の古いところにも行はれてゐた。これは無理もない誤解で、西洋でも以前はさう考へられてゐたのみか、今日尙さういふ誤解が跡を絕つてはゐない。日本でいふと、殊に日本語と同系語とを比較する所の比較言語學を言語學の主要部と考へたがる傾がある。今日の歐米の言語學の發達を顧みると、サンスクリット語學者がこのインドの古語を中心として同系の東西古今の言語と比較して印歐比較言語學を起した爲め、後年それを普及した英

國のマクス・ミュラアだの米國のホヰットニイだのといふ十九世紀晩期の學者がやはり梵語學者出身だつたから、言語學はそれによつて梵語中心の印歐比較言語學的色彩を濃厚にしてしまつたのである。これら二大家は、獨逸仕込みではあり、獨逸の舊派印歐比較言語學全盛期に學びあはせた經歷上、殊に前者は比較派の泰斗シュライヘルの流を汲み、且つ進化論の影響をも受けて、言語學を自然科學どりあつかひにしたやうな點に於て、ホヰットニイと激しい論爭をして、その論爭が計らずも言語學の宣傳に役立つことになつた始末である。兩碩學とも、日本の明治初期の學術界に最も多くの感化を及ぼした二大英語國人であつた。且つ英にあつては南條・笠原・高楠諸氏らの修學があり、米にあつては森有禮とのいきさつと夙に黑田行次郎の言語學書譯述とがあつたりした。從つて言語學には英米學說が先入主となつてしまつたのみならず、明治二十年前後におけるチャンバレン氏の感化なども大に手つだつた樣なわけで、言語の比較が言語學の主潮を形作つたらしく見える。やがて日本古代史の新研究も明治二十年代から起りはじめ、日本民族の本源に關する問題なども、それより三十年代へかけて漸く擡頭しはじめた。明治初年代に起つた英人アストンの日鮮兩語の比較研究の如きより、二十年代の末より三十年へ及ぶ白鳥氏の日鮮語の比較および其他滿蒙二三語と支那史籍中の塞外民族語との比較などが、盛に行はれ、私たちも時勢にひきいれられて、一方には東洋語の比較學派とでもいふ方面に加はる緣をもつた。他方には指導者たる獨人フロオレンツ氏の講義なども印歐比較言語學の方に後進生を啓蒙した。私たちと田口氏との論爭などにもよくあらはれてゐるが如く、明治三十年代の日本の言語學界には、表面狹義の比較學風が漲つてゐたと見られるのである。最近に至るまでは、日本にはこの比較學派が主潮をなしてゐたと言へる。今日でも此の風潮が決して絕えたわけではなく、今後なほ續出もするであらう。此の明治三十年代の主潮によつて育くまれた金澤氏の幾多の業績の如きは、空前の產物として特筆さるべきであらう。

これら明治二十七八年以降十有餘年間に於て日本の大學に於て邦人として最初の言語學講座の擔任者たる上田氏が一方に於て東京帝國大學に於て國語研究室を舊來の言語取調所から發達せしめて一方には文獻資料を益々蒐集し他方には少壯の學徒を勉學させる機關を設備したことは、ひとり國語學史上に期を劃したのみならず、延いて日本の言語學にも少からぬ餘澤を及ぼしたことになる。現任東大の敎授たる橋本氏はもとより、古くは國語政策國語教育の保科氏も、ロシヤ語の八杉氏も中程には歌謠史の高野氏や後れて方言の東條氏も、國語國文の吉澤氏も亦不肖わたくしの如きも、これかれ前後しまた年限の多少こそあるが、みな此の研究室に育くまれたのであつた。その敎授室に在つて年々パウルの言語史諸原理の輪講を指導されて演習を受けた私たち、少くとも私一箇にとつては、絶大な影響をパウルの訓練から得たことを常に感銘する。たゞ爾來下愚にして移らざるのは止むを得ぬ。パウルを日本の言語學界に咀嚼せしめた點だけでも、指導者上田氏の功績は忘れてはならないと思ふ。私はこれらの時代を表面にあらはれた所で比較言語學の主潮の横流時代のやうに述べたが、然し他面から觀ると、同じ時代は新國語學の育成時代とも言はれようし、或は國語新研究の素材が內らから集められ、又方法と理論とが、外がはから、卽ち言語學から供給された時代であるから、言語學が國語學的傾向を根柢とするに至つた劃期的時代だとも言ひ得るのではないかと思ふ。

明治三十五年の創設にかゝる文部省內の國語調査委員會には、博言學提唱の加藤弘之氏を長に戴き、國語研究室主任の上田氏を主事として、大槻氏・芳賀氏を主査に、實證的國語研究の業績に富む大矢氏をはじめ、論理的規範文典の岡田正美氏、國語運動の保科氏、國語學史の龜田氏の如き、つゞいては前記の山田孝雄氏また本居清造氏その他を加へて前後十名內外の補助員を擧げて調査が十年ほども繼續された。私も創立最初の前半滿五年間驥尾に附して同會に勉學したが、私にとつては曾てパウルの諸原理に學んだ所を日本の現代語に實證するの機會が與へられたのを非常

に悦んだ。また先進の士に就いて、僚友の人々に就いて、古來の國語の史的考察の資料と練磨との機會が授けられたのを感謝した。足利時代の抄物に關する研究を試みたのも、上田・大矢二氏より受けた刺戟に基くものであつて、京都轉任後には五山文學の上村觀光氏を薦めて抄物文獻の蒐集と拔萃とを努めしめた思出も伴ふ。この初期の國語調査事業は、動機と形式とは、規範的であつたにした所が、又時にその種の成績と試案とを發表したこともあつたが、大部分の實績は國語史料と方言資料との編輯などが、記載的なものもあれば說明的なものもあり、規範的なものも交るといふ具合であつた。成績はともかくもとして、私一人にとつては、第一に現代國語をば或は如實に觀察し或は標準的に判定し、而して標準と實相との對立や交渉を考察し、進んでは現代語より遡つて前代語を逆視する見方を自ら養成する樣な自修の好機を有つたことを難有く思つた。國語史料としての吉利支丹文獻に對する涉獵の端緒は、時代上接續する足利時代の抄物の取扱ひに次いで、此の自修時期に於て作られたのであつた。やがて西遊中に主としてイギリスに於て獲得したのが、天草本の平家物語であり、伊曾保物語であり、ロドリゲエスの日本口語文典であり、日葡辭典であつたのである。〔——私は、つひ自身を語りつひ述懷に耽りすぎたのを遺憾とする。日本の言語學の蒙昧期あるひは草創期を語る公けの話から私の懷舊談に陷つたことについて讀者の寬恕を乞はねばならぬ。——〕

パウルの言語史諸原理、或は寧ろ言語變遷の諸原理といふ方が分り易いと思ふが、それを英語にストロング等が纂譯して和解(わげ)したのを更に日本語に和らげ直したのが、八杉氏の言語史綱要である。金澤氏が佛のダルメステテルの意義史論を重譯し、また英のセイスの言語學を譯し、保科氏が米のホヰットニイの言語發達論を譯し、後れて金澤後藤二氏がマクス・ミュラアの言語學を譯し、金田一氏がスヰイトの新言語學を譯したやうな、明治三十年頃から四十餘年までの間の十有餘年にわたる數種の譯述事業のうちで、右に擧げたパウルの學說の紹介は、譯者に感謝すべき仕事で

あつた。然し、時利あらず、同じく早稻田の名著綱要に出たイェスペルセンの言語進步論の拙譯と共に、或は斯の學界の一顧をも經なかつたかも知れない。然し其の時代に於ては、パウルの紹介は、スヰイト及びイェスペルセンの二著の紹介とあはせて、最も重要なるものとせねばならぬ。但し三書いづれも和解式のもので、著しく簡約され或は和様に換へられてしまつたのである。

時勢は移つた。パウルも大正十年（一九二一）七十六歳を以て永眠した。一世を風靡した言語史のプリンチピエン（諸原理）は、その死の前年の一九二〇年改訂五版を重ねたが、初版が出たのが明治十三年（一八八〇）であつた。八杉氏の綱要（一六八頁）が出たのが、明治三十四年（一九〇一）であつた。私どもは原書第三版の一八九八年（明治三一）本を以て演習したのであつた。その後遡つてシュタインタアルとフンボルトに及び、降つては當時新刊のスヰイトやヴントに至つたのであるが、私は各自の國語學上の業績を多く持つたパウルとスヰイトに傾到せざるを得なかつた。何となれば、今古の言語に關して透徹した意識と感覺とを獲得し、史料と史實とを檢討して、最も正確に安全に又容易に精細に言語事實を捉へることの出來るのは、自分の母國語に如くものはない筈である。而してそれは愛する母國語であるから、且又これによつて未熟なりとも言語創造も可能であるから、若し同じ程度の才能を以て進むならば、當然自分の母國語を資料にするのが、順序としても適當だと考へねばならぬ。それ故に私は先づ以てパウル流の指導原理を以て導かれるのがよいと思つたのである。パウルなりスヰイトなりの國語學上の業績を模範として、兩者の原理や方法に由つて具體的言語事實を闡明してゆくならば、いはゆる鵠を刻して成らざるも鶩に類するの成果を收めることが出來よう。虎を畫かんとするの抱負は固よりもちたいのであるが、少くとも私の能力ではそれは望まれないからである。また日本の言語學界の健全な進步を求めるなら、順序としてそれが適當だつたと言へるだらう。

然し四時の序功を成すものは去ると云ふが、遲々として功を收め得ざる下愚の場合においては、輕々に移る能はざる有樣である。パウルの言語史學の理論を應用するならば、私たちの古い表現法でいふと、新を知つて古を溫ねる方法、先づ言語の個體を成す所の自己の言語の內省なり他の言語個體の觀察なりを試みつゝ漸次言語個體と言語團體との交涉を究めて、現に吾々が有する言語活動を把握し體得した後に、段々過去の言語既往の言語に及び異鄕の言語外國の言語に進んでゆく。パウルの近接した先進者にはシュタインタアルやヘルバルトがあるが、その思想はフンボルトの言語哲學を能く繼承してゐるものとすべきであらう。フンボルトが言語をエルゴンとして觀ずにエネルゲイアとして觀ることを教へたのは、言語を、固定したもの、出來上つたもの、具足したもの、與へ授けられたもの、纏め上がつたもの、等々と考へずに、活動させる力、生々たる力、推進させてゆく力、流轉させる力、等々と考へることを說いたものと思ふ。物とみれば言語そのもの、力とみれば言語活動そのこと。物か力か。靜か動か。出來たものか又は働きか。この相違である。ロマンチック興起以前の見方と、ロマンチック以後とで其の見方が正にちがふ。研究を指導する學問にしても一方は論理學に依り他方は心理學に據ると云ふやうに、所依の根據も互に相ちがつてゐる。その心理學的方針を學說的に導いたのが、シュタインタアルとすれば、國語史實の上に適用したのが、パウルとすべきである。パウルにおいて、言語史、言語の歷史（シュプラハゲシヒテ）、といふ意義は、單に日本などで現はれてゐる記載的乃至考證的な單語誌や語源誌そのものをさすのではなくして、言語の經歷志、言語の實相志、といふやうな概念をもつとする方が、パウルの本意に當るであらう。文獻的考證は、要するに末技に屬しはするが、確實な研究の端緖としては、よその見る眼もまだるこしきばかりに、陰に陽に、こだはり滯ることもあるであらうことは止むを得ない。考證と立論を兼ね併せたところに、パウルの長所は存するのであらう。パウルは、實は言語史的の一形式にすぎざる比較研究は、グリムの

如くに之を試みなかつた。殆ど自己の國語の範圍內に蹐跼して、稍進んで同分派のゲルマニアの諸民族語及び自他の諸方言に進出し、時にはロオマンス諸分派の言語と西洋古典語とにも及んだが、全く一知半解の遠國語や異系語には突入しなかつた。そこではスキイトとかなり遠ふ。パウルは自己が研究者が內省なり觀察なり實驗なりの方法によつて完全に知得することの出來る自國語を選んで、先づ己れを知つてその己れに近き彼れに及び、次に遠からざる他に及んで、智識の堅實性をねらつたものだと思ふ。從つて古典語よりは近代語を取つた。自國語にしても現代語より逆視せんと欲した。グリム以來漸次考慮されて來た言語感覺なるものを尊重して現代語に臨んだ。その言語感覺や言語意識といふものを以て、言語生活界の批判に當らんとする場合には、どうしても自國の現代語が理想的であり從つて出發點とならざるを得ない。そこに言語變遷の諸原理が考へられて來る。私はその諸原理の以て立つ所の哲學的基礎や心理學的根據よりも寧ろその諸原理がそれぞれの專門學者が從事する國語の生々たる變遷の跡を攻究する際の目安となるか參考となるかといふ點に重要性を認めたいと思ふ。但しその諸原理が凡て之を中外に施こして戾らざる底の普遍適應性があるとは信じられない。然し個々の假定原理は、國語國語によつて當然異同がなきを得ない。日本の國語學者は、一々その目安を循奉するには及ばないが、一應は國語への適否を吟味することによつて益を得ることが多い。而してそれらの個々の原理よりもむしろ言語研究の指針が吾々に與へられたことを感謝してよいのではなからうかと思ふ。言語上の個人對集團、個人言語と社會言語との會通、それらを考へること、個人言語の生々流轉性、言語の生滅流動の現象、それらを念頭にもつこと、等は私たちが日本の國語を、現在の國語を、いな寧ろ現代の方言を、個個言を、個人言語を、それぞれ考察するときに、大に役に立つと思ふ。方言の價値、規範的意義なる國語を離れての方言の價値、標準語と現實語との交涉、發音や意義の流動變易、私たちは日本國語の現在の生々狀態を考察する場

合に、正しき見方がどのくらゐ敎へられるか。蓋し計り知るべからざるものがある。エルゴンとして與へられた日本語の文法組織を、常に規範的に見て殆ど發生的に見たがらない傾向を打破する場合に、パウルの學說はいかに力强く吾々を支持するか、說き去り說き來れば際限がなからう。

パウルにはグリムの如き情熱氣魄がないやうに見える。然し一八七〇年代におけるドイツの綴字改良案に對して一八八〇年（プリンチピエン出版の年）に彼がベルリン出版の獨逸時事公論の十二月號に草した批判の如きは、國語史上の論據に立つて文字正綴法を批評した文章として大に吾等の意を得たものと云ひたい。私が唯一度聽講したばかりの講義振りより受けた印象は、その昂らざる風貌と共に大に物足らなかつた憾みはあるけれども、之に反して名著より受けた感激は終生渝らざるものがある。むろんパウルの名著以後進步絕えざる歐洲の言語學界において、新に宗とすべき言語學書の現出は、理の當然であつて怪むを要せずむろん歡迎されねばならない。新學說の紹介、新方針の嚮導、新方案の提示、いづれも望ましい事どもではあるけれども、われらの現代既往の言語そのもの言語活動そのこと生々極りなき言語のあらはれとはたらきとを其眞相を其實狀を記載し探究して、われらの國語の差別觀を通して言語一般の普遍原則を認識する方向に向つて吾々は邁進してゆきたいと思ふばかりである。ゲエテの金言に、外國語を知らざる者は自國語を知る能はざる者なり、と云ふ樣な文句があると聞く。一應尤もであるが、それと反對に、吾々は寧ろ、自國語を知らざる者は他國語を知る能はざる者なり、と云つてよからうと思ふ。彼れを知り己れを知ると云ふ漢土の名言も別に存するが、實は先づ己れを知つて而る後に彼れを知るべきであらう。畢竟は、西洋の古への聖言に知られてゐる所の、「己れを知れ」である。卽ち自國の國語を、現在の言語を、自己の言語を、である。研究は、敢て古語に限るべきでない、むしろ新語の方が貴いのである。新語の生によつて古語の生が初めて解せられるのである。

活きた現在語によつて死んだ往古語に生命を吹き込むのである。斯くの如くして良うすれば異鄕の外國の言語の理解と味得とにも達せられる筈である。然しながら異邦の遠境の殊域の言語に耳を閉せとは言ふべきでない。そこにはゲエテの名言が戒めてをる。他との對照によつて自國語の特長がますます分り、他との比較によつて本國語の地位が鮮やかに知られるわけである。

是に於て私たちは、既成の比較言語學より、その樣式と方法と理論との參酌はともかくもとして、日本語を中心としての比較言語學を立てんと欲するならば、或は少くとも日本語の系統を定めんと欲するならば、又は數步を退いて個々の日本語の語原を比較法によつて知らんと欲するならば、先づその日本語の歷史を十分に考究しておかなければならない。次には比較に供すべき相手の遠近外國語の歷史を知つてをらなければならない。これ亦已れを知り彼れを知つてかゝる所以である。印歐比較言語學の方法を究めずして、たゞ成果の皮相を模倣して、明治以來試みた幾多不健全な國語と異族語との比較の如きは、その邦人たると外人たるを問はず、一に當該國語の歷史を無視して事に臨んだ過失を侵した場合が甚だ多かつた。國語と梵語との比較、波斯語との比較、希臘語との比較、南洋語との比較、朝鮮語との比較、アイヌ語との比較、支那語との比較、いづれもそれぞれの歷史的考證を試みずして妄進してをる。此點から云ふと、日本や支那における近世の考證學者の言語研究の方が、指導の原理もなく既定の方法もなくして而も精到の域に達してをる。比較に供すべき自他の言語に對しては、須く文獻學的方法と考證學的檢討とを施さなければならない。支那古文獻にあらはれた西域外來語を摘出して、波斯邊の殊域の言語と比較したラウフェルの支那伊蘭考の如きは、廣義の東洋比較言語學上の產物として、その方法を範とすべきである。本來の比較言語學に於ては、比較に供する諸々の民族語の本來の固有單語と外來の輸入單語との辨別が肝要であつて、當然外來要素を當面の比較か

ら淘汰すべき順序ではあるけれども、然し一方から見れば、比較言語學の仕事の手順として或はその副産物として、外來語の摘出と其の考査とが現はれて來る筈である。されば外來語の研究といふことも亦比較言語學から見逃がすわけにはゆかないのである。

尤も近代の外來語殊に最近のものや現代のものになれば、さういふむつかしい比較言語學的方法に由つて調べる必要はない。然しそれでも近代のものは、やはり文獻學的な考證を經ないでは濟まない。最近の外來語、維新前後から以降のものの中には、割合に厄介なものもあり、又現代吾々の眼前に入つて來たものでも、その原語だけは分つたところが、輸入の徑路や年代になると、同じく文獻考證を要する場合が往々生ずる。是に於てか、外來語研究と題する季刊雜誌が昨年來現はれる樣になり、それが主として最近の洋語の外來や歸化や轉訛や衰滅やの經過を歷々と記載し說明し考證するの機關に供せられる必要がおこつた所以である。平素見聞に上つてくる所の外來語の夥しいこと、それが專門的技術的の方面から迅速に平常語のうちへ侵入し普及してくる其の速度、驚くべき有樣であつて、後々の言語誌のためにでも、或は眼前の國語世相誌の上にでも、速に登錄しておくことが、適切であると思ふ。文化史上から見るの要あるのみならず、言語心理の上からも一顧すべき價値がある。當代語誌のうちにも、既に史的考察を經べき一面が存するのであるから、現代語誌も國語史學の領域に屬する問題なのである。現代語誌はかゝる史的關係を離れても言語の社會性を考察するの料にも供せられる。然しながら横さまに起る當代の社會と個人との言語上の交涉は、時處の經過を逸し縱さまの史的關係を離れた考察に由るよりも、史的檢討を要すべき部分の方が大きくはないであらうか。これはひとり外來語の場合についてのみ言はるべきのではなく、一般的に言はるべき問題である。眼前に展開する言語實相のうち、外來語をもこめての流行語の轉變極りなき狀態も、載錄を要し又言語社會學的考究に價するで

あらう。現代より遡つて明治初代なり化政年度なり天明年度なりの流行語やいはゆる通言なるものも、生き生きと吾吾に明かになつてくるであらう。それはやはり或程度までの文獻上の考證を要し心理的社會的考察に委すべきものである。卽ちこれらが我が國語の範圍内に起るかぎり、考究は國語學の範圍に屬すべきが當然であらう。

パウルの諸原理を二重に簡約した八杉氏の言語史綱要にしても、スキイトの言語史を和らげた金田一氏の新言語學にしても、いかほど國語學者の參考に資せられたかは知られないけれども、近年における言語學の新機運に方つて、小林氏の譯補したソッスュウルの言語學原論に見えた所の共時的と通時的との新見解が一層私が上に縷述したパウルの舊見解を進めつゝ、それが國語の新研究に資益さるべきものなることは、私の疑はない所である。

方言の調査と研究とが旺盛たる國語學界近年の新傾向の如きも、決して一時の流行性なものでなく、單に國語の文獻的考證を補遺し擴充するといふ意味ばかりでもなく、パウル流の考方からしても、ソッスュウル風の見地からしても、國語の研究上當然な進路として須く之を歡迎助長すべきだと思ふ。それの動機や方法は、人によつて違ふ筈であり、專門は相違してゐるにしても、歸趨や結果に於ては、相補益してゐる點が多かるべき筈である。私たちのがはから云へば、柳田氏の業績の如きも、動機や目的や方法の如何に拘はらず、その個々の成果は國語學に落ちてゆくべきものだと思ふ。また大體論や方法論の上から見ても、方言學のみならず國語學の上にも寄與する所が、非常に多かるべき筈である。その研究はグリム以外の新領土を開拓しつゝあるものだと言つても差支ない。日本人と獨逸人との相違から來る所の理窟の立て樣の違ひなどは問題ではないし、資料の種類と範圍との違ひも別である。同氏の犀利明敏な語原考の如きも取つて以て參考すべき點が多いのは、往々文獻考證を超越するの概があるのは、言語の精神を能く把んでゐる爲に外ならぬ。方言の採集を事とする記載的方面の仕事も、各地全盛の有樣であつて、國語文獻の蒐集校

勘の業と共に行はれてゐる所の考證學的仕事と對立して、互に相分業補益しつゝあると思ふ。但し或は互に相對峙反目し、或は殆ど相關知せざる向きもないではない樣である。然し若し國語學者にして方言調査の舊態と稚拙とをのみ知つて、規範的な取扱ひ以外に方言の價値を輕視したならば、その人は時代後れの毀りを免れないであらう。況んや比較方言學の可能性の漸く內外に認知されつゝある時勢に於て、言語學者が、遠境古代の言語の比較研究のみを貴しとなし、――むろんその困難さに對する敬重の念は缺かれないにしても――卑近な方言比較を蔑視したならば、それも亦物事の價値判斷の目安を知らないものとされるであらう。個人言に對しての集團言たる地方語生活の忠實なる研究は、實は言語研究の第一步なのである。

スキイトがその小著にして大著たる言語史に於て、パウルが敢てしなかつた所の言語比較を試み遠地の言語に考察を及ぼした勇猛心は、感嘆に堪へないが、方言の研究に對して存外淡泊であつたのは稍意外である。少くともパウルに比して關心が薄かつたと思ふ。その不備は二十世紀の初期より漸く進展し來たつた所のフランス或はフランス系統の國語方言學によつて大に補はれて來たのであるが、それは明治四十年（一九〇七）以後日本の方言研究が最近數年前に至るまで甚だ停滯して居たのと相反する。殊に大戰以後目醒しきフランス系統の言語學界に於て、巨頭メイエが小著ながらも、言語史學における比較研究法を取扱つた所の十年前北歐における講演錄の如きを見れば、最近歐洲言語學界に於て方言學が益々重要性を帶びて來たことが分る。從つて我國に於ても近時そのがはの新文獻が譯述されて來たことも、東西學問の契合ともいふべきであらう。右の小著も、目下翻譯に着手されてゐると云ふから、やがて本邦の新學徒を利益する日もあるに違ひない。

スキイトもイェスペルセンと共に近代自國語の研究或は近邇同系語の研究とから出發して次第に往古の同系語と遠方の異系語とに向つて眼界を廣めていつた學者である。基礎智識として各自國の現代語殊に其の音韻現象に深く通曉し且つ音韻史に達してゐた。健全な發途と堅實な地歩を履んで進んだのである。音聲學初歩や英語音韻史をはじめ前掲の言語史などの著述によつて私淑してゐた壯年期の私は、著者スヰイト翁を明治四十一年の一九〇八年の初冬に、おとづれて唯一度日本語の發音の檢討に與かつたことがあつたが、堅固な實踐的學風は、いたく自分を動かしたのであつた。音聲學の端緒は、それより二十年餘りも前から、幼稚な日本の言語學界に對しては或は無感化に終つたかも知れないが、田中館村岡二氏の如き先進物理學者によつて紹介されてもをる。又發音矯正や聾啞教育に資せられた視話法の如きが伊澤氏の如き教育界の舊元老株の人によつて導き入れられた事もあつた。然し、新しい刺戟を明治三十年代の新學界に向つて眞向に與へたのは、英國のエドワアヅ氏であつたらう。明治二十年代の末期より獨文獨語學のフロオレンツ氏等の外人と上田氏とによつて既に聲音學の智識を啓蒙されてゐた私たち少壯の人々は、明治三十三年（一九〇〇）新渡の壯年音聲研究家たるエドワアヅ氏から、當時にあつては吾々に目新しかつたカイモグラフに由る實驗音聲學的裝置や、人造口蓋に由るパラトグラムや、それやこれやの新しい道具を以て吾々自身の發音を實驗し得たのであつた。先進の岡倉氏の誘導にも與かつたことと記憶するが、私自身が同友八杉氏と共に隔日エドワアヅに日本語の發音を聞かせつゝ自他協同して音聲の分解や綜合を感知し自得したことは、私たち若き學徒にとつてこよなき良き經驗であつた。エドワアヅは、フランスのポオル・パシイに就いて斯の學問を修めた關係上、歸西後に、佛文を以て日本語の發音研究の成果を編して、日本語の音聲學的研究と題する著書を出版し、それを巴里大學の學位論文とした。その書中に見えるパラトグラムは主として私のものであつたし、國語音の記載や考察の約一半は、未熟な自分

の感知した所のものを提供したのに基いてをる。その稚拙な考察の成果の價値は別として、私は自國語の發音の觀察と、殊に自己の發音の自省とについて多大な練習をする機會が與へられたことを今尙感銘してゐる。エドワアヅは、そのをり私たちにスヰイトの新著たる言語史と、イェスペルセンの名著たる言語進歩論とを示してくれた。若かつた自分は、それらの二著を直に注文して大に喜んだ。私は、明治三十五年の春、就職の初に方つて若溪に於て其のスヰイトを教科書に使つて講讀を試み、イェスペルセンの方は早稻田の名著綱要のうちに摘譯を與へた。當時初つ物ずきの自分は、潑剌たる氣分で、さう云ふ新著の紹介先驅者を以て任じてもゐた。偶々二書の精神がうぶな私の國語研究の前途に光明を與へてくれたのはこよなき喜である。

大正年間このかたの二十年間、日本語の音聲學が長足の進歩を遂げたことは、今更述べるの要はないが、大に特筆に價する所である。私たちが學生時代に、聲音學といふ名稱であつたものが、その後音聲學と改稱された。その方が誤解がなくてよい。その音聲學が、佐久間氏の如き心理學者、小幡氏の如き物理學者によつて、深く研究されて來たのも、その學問の性質上當然な順序である。神保氏の如き言語學者の研究をはじめ、石黑三宅兩氏の努力によつて、上田岡倉藤岡三氏等を戴いて日本音聲協會が組織され、國音の研究が逐次現はれて來たのも慶ぶべき現象である。之を明治三十初年代に創立されて雜誌三卷十數冊を出して三年程にして滅びた言語學會の事業に比して、さすがに時勢の進歩を思はしめる。其の頃のエドワアヅ氏に比すれば同じ英國人たるパアマア氏が大正十年以降本邦の英語學の發音練習に盡くした功績と、ロオマ字問題の研究、殊に所謂日本式のそれの研究に對する支持と、これらの影響は共に前者に比して遙かに大きいと云へるであらう。近年歐洲の學界に唱導される所の音聲學研究と音韻論又は音韻學の研究との差別觀の如きも、日本の學界に傳はつて來た。綴字問題ばかりでなく、方言の調査に於ても、發音上の研究が

重要されて來、而も早くも之に對する批評の聲が聞こえるに至つた位である。なほ私は最近科學界にあつて前記小幡氏の分の外、高橋正一氏の電氣工學上から日本語母韻の實驗を試みた論文の現はれたことを附け加へておきたい。

日本の音聲學から日本の言語學また特に國語學への寄與は、日本の心理學者が日本語に對する現在將來の貢獻に比して、私たちの期待は稍少い。日本心理學會等の報告にも、國語の範圍に於て、殊に兒童の言語に關し、發音の聽取などに關し、有益な資料を言語學者に供しつゝあるのみならず、時に語原論などの言語史學的方面に於て嶄新なる見解を發表して國語史家を驚かすことがある。或は寧ろ國語史家に對して頂門の一針を與へんとするが如くにも見える。言語史が言語學の全部か主要部かと主張してをる言語史學者に對し、或は比較言語學が言語學の根幹を成すと妄信する比較派に對し、古文獻にのみ資料を仰がんとする文獻考證學派に對し、警醒せんとするものがありげに窺はれる。二十年前にヴントの民族心理學の言語篇が日本の學界に入り、その後その綱要の譯出をも見たが、それに促がされて國語に對する特殊の民族心理學的研究が行はれて何等かの業績を擧げたか否かを私は知らない。最近に至つては、心理學の新傾向より生れて日本語の表現法を根本的に廣く調査せんとする城戸幡太郎氏の企圖あるを知り、數年前その古代日本人の世界觀を考察した著書のうちにも同氏獨特の解釋學的研究がみえるが、個々の古語の語原語史的研究に關しては、議すべきものがないではない。些事ながらパウルの類推論（アナロギイ）に關して誤解かと思ふ點が見受けられるのは、聊か遺憾とする。他方には、日本語原の心理學的解釋と題する安井洋氏の新著が、それに稍後れて出た。それは大矢透氏や大島正健氏の舊著などとも相通ふところのある舊傳統の語原説に屬する考察法を行つたものである。それは語原語史の文獻考證學的研究に對して別流を成し、松岡靜雄氏の新研究等とも相俟つて、彼此合流してゆくべき樣な所もあつて、城戸氏等の向後の新研究の參考材料たるべきものが多かりさうである。林甕臣氏の日本語原學の出版の如

きも、亦かゝる機運に育くまれたものと見られさうで、偶然でもなかりさうに感ぜられる。いづれも私自身の傾向とは違ふけれども、私は他山の石として尊重し、特に取つて以て參照の資に供したいと思ふ。ともかくも國語を内らから直觀的にでも獨斷的にでも洞見しようとする語原學風に對しては、なまじな似而非比較言語學風に對するよりも、贊意を表し且つ期待を繫ぎたい。ヴントが彼の大著を出した後、獨逸の言語史學者より受けた非難のごときものが、日本では未だ現はれて居ないのは致方なからうが、私は言語心理學と言語史學とは提携して進むべきものだと思ふ。見地こそ違へ、それが實證的なる限り、相補充してゆくべきではないかと信ずる。實證主義なる點に於て二者は姉妹たるべきものと考へて差支ないのではないか。次に一事例を取つて卑見を述べよう。

　三十餘年前に上田氏によつてＰ音考といふ形式に於て提唱された波行原音考は、當時岡澤氏等二三家の反對論もあつたが、漸次立證補考されて今日に至つては、疑ふべき者はないやうになつた。私も波行沿革考については講壇に論文に屢々言語史學的に考證餘す所なからんと欲した。琉球語及び其他の方言上の調査、アイヌ及び朝鮮語における場合、印歐系統の語はもちろん、支那及び南洋における類例、分布最も廣きＰ音原流考資料は、豐富に實證的に集められた。中世近世における日本語の文獻資料は、内外に亙つて非常に廣く寄せることが出來た。橋本氏のＰＦ變遷の時代的考證と共に、私のＦＨ變遷の時代的考證は、文獻考證學的の方法を十分に盡くしてあるつもりである。抑も音韻史考としての言語史學的討究には、時代と方處との經緯觀が重要であると思ふ。これに若し言語心理學的説明が與へられると、完全な説明が附く筈だと考へる。そこで私は往年ヴント風の民族心理學に影響されて、ＰＦの變遷を平安朝の盛時に方つて京都の宮廷生活における言語者の表情に胚胎するものと説明されはしまいかと臆測して一試案を考へたことがあつた。密閉唇音（重唇音）と摩擦唇音（輕唇音）との變遷が、唇邊筋肉の働きの變化に由るものたる以

上、唇の働きの變化は顏面表情の變化に共くものとすべきではなからうか。私はかう云ふ生理的心理的な説明を試みたことがあつた。これは一例であるが、ともかくも發音運動そのはたらきも、發音の變動そのことも、心理的なはたらきから起る以上は、音韻變化の説明は、單なる言語上の事實調査、すなはち文獻考證にしろ口語方言の徵證にしろ、いづれにてしても事實の精細な調査の成果だけでは、説明がつかない。そこでその説明の力をば、個人心理にしても集團心理にしても、心理學に求めようとする。元來、音その物には變化がありやうはない。音を發する働きざまの變化が、假りに音韻の變化とも名づけられてゐる。むしろ發音の變化とも推移とも言ふ方が當つてゐよう。その變化の形跡を文獻に徵したり變化の過程を口語で調べたりして私たちは先づ考證をする。その考證が行きづまる所に、その發音運動の變化を、發音機關の働きの變化を、即ち物の働きの變化を、起すところの原因が個人及び集團の心のはたらきの變化に由つて説明されべきではないかと説明を試みる。更にその又根本の心のはたらきの變化する究竟の原因を知りたくなる。そこまではともかくもとして、一應の所までの心理的説明が欲しくなる。そこで所依の學説は古くとも、パウルは其の音韻轉變論において或る説明を與へた。その説明法が當つてゐるにしろ當らぬにしろ、研究者はそこまで遡つて音韻變化の原因を知り得たらば幸だとするのである。かくて言語史學は言語心理學に向つてその點に光明を與へよと希求するのである。これは唯の一例にすぎないが、此の種の要求は言語史のがはにまだ多々ある。

再び我が國語界に復つて論じてみると、大學の課程又は學科の名において「國語學」といふ場合を除いて、大學以下の高等中等初等などの教育における「國語」といふ科目の名は、語學的部分と文學的部分とを併せた包括的な内容をもつてゐる。大學教育または學問研究の領域内に至つては、その「國語」といふ名が、初めて國語學と國文學との

二つに分化し又分科してゆく。然し最も普通には、それらのいづれの場合にも、國語の教育といふと、當然それが主として規範的の態度から見られてゆき、進んでは心理學的方面からの考察が開かれてゆく。但しその心理學的な研究は、多くは國語の初等教育の方面に偏してゐる様に見える。中等高等の國語教育にあつては、文語の語法や作文の規範的方面と教科書あるひは文學書の語句の解釋的方面との二つに限られてゐる。而して口語そのものの練習は殆ど缺けてをる。また外國語學との連絡は、事實上絶えてゐると云つてよい。一言すれば、文語體にせよ口語體にせよ形式上には文章構成の練習と文章の語法的乃至語句的解釋とが行はれるにすぎない。文章が主で、言語が從である。言語の修練と言語の生きた語法的乃至語句的説明とは、重きをおかれてない。名は國語教育といつても實は國文教育である。從つて語法にしても語釋にしても、古風な説明を以て滿足し又滿足させて、新しい説明は全く試用もされない。歴史的心理的な説明でなく、多く超史的論理的な説明を以て治まつてゐる。尙古的であつて當今的でない。溫古的であつて知新的でない。當代の言語感覺や言語生活といふものは、初めから無視されてゐる。殊に語法の説明になると、超時的でばかりあつて、歴時的でも等時的でもない。言語の史實と現相とを超越した不斷な一貫的法則を認識して規律づけようとするばかりである。國語の史實と現相との歴史的心理的説明は蔑視されてゐる。この超時的説明が常に强く教科的規範文典を支配し、記述的文典の成立までは之を認めても、未だ心理的歴史的説明文典への向上は考へられてゐない。言語を規律する所の語法上の法則の先天的實在性を認めて、その法則の發生と根據と變動との説明を歴史的心理的に考察するまでに至らない。

これは現代國語の實生活を等時的乃至歴時的に考究せず心理的に説明を試みない爲であつて、この點は東洋流の國語學と國語教育との尙古主義文獻主義の餘弊であると思ふ。國語の學問も教育も共に、文獻本位であつて、文を重ん

上、唇の働きの變化は顏面表情の變化に基くものとすべきではなからうか。私はかう云ふ生理的心理的な說明を試みたことがあつた。これは一例であるが、ともかくも發音運動そのはたらきも、發音の變動そのことも、心理的なはたらきから起る以上は、音韻變化の說明は、單なる言語上の事實調査、すなはち文獻考證にしろ口語方言の徵證にしろ、いづれにてしても事實の精細な調査の成果だけでは、說明がつかない。そこでその說明の力をば、個人心理にしても集團心理にしても、心理學に求めようとする。元來、音その物には變化がありやうはない。音を發する働きざまの變化が、假りに音韻の變化とも名づけられてゐる。むしろ發音の變化とも推移とも言ふ方が當つてゐよう。その變化の形跡を文獻に徵したり變化の過程を口語で調べたりして私たちは先づ考證をする。その考證が行きづまる所に、その發音運動の變化を、發音機關の働きの變化を、卽ち物の働きの變化を、起すところの原因が個人及び集團の心のはたらきの變化に由つて說明されべきではないかと說明を試みる。更にその又根本の心のはたらきの變化する究竟の原因を知りたくなる。そこまではともかくもとして、一應の所までの心理的說明が欲しくなる。そこで所依の學說は古くとも、パウルは其の音韻轉變論において或る說明を與へた。その說明法が當つてゐるにしろ當らぬにしろ、研究者はそこまで遡つて音韻變化の原因を知り得たらば幸だとするのである。かくて言語史學は言語心理學に向つてその點に光明を與へよと希求するのである。これは唯の一例にすぎないが、此の種の要求は言語史のがはにまだ多々ある。

再び我が國語界に復つて論じてみると、大學の課程又は學科の名において「國語學」といふ場合を除いて、大學以下の高等中等初等などの教育における「國語」といふ科目の名は、語學的部分と文學的部分とを倂せた包括的な内容をもつてゐる。大學教育または學問研究の領域内に至つては、その「國語」といふ名が、初めて國語學と國文學との

二つに分化し又分科してゆく。然し最も普通には、それらのいづれの場合にも、國語の教育といふと、當然それが主として規範的の態度から見られてゆき、進んでは心理學的方面からの考察が開かれてゆく。但しその心理學的な研究は、多くは國語の初等教育の方面に偏してゐる樣に見える。中等高等の國語教育にあつては、文語の語法や作文の規範的方面と教科書あるひは文學書の語句の解釋的方面との二つに限られてゐる。而して口語そのものの練習は殆ど缺けてをる。また外國語學との連絡は、事實上絶えてゐると云つてよい。一言すれば、文語體にせよ口語體にせよ形式上には文章構成の練習と文章の語法的乃至語句的解釋とが行はれるにすぎない。文章が主で、言語が從である。言語の修練と言語の生きた語法的乃至語句的說明とは、重きをおかれてない。名は國語教育といつても實は國文教育である。從つて語法にしても語釋にしても、古風な說明を以て滿足し又滿足させて、新しい說明は全く試用もされない。歷史的心理的な說明でなく、多く超史的論理的な說明を以て治まつてゐる。尙古的であつて當今的でない。溫古的であつて知新的でない。當代の言語感覺や言語生活といふものは、初めから無視されてゐる。殊に語法の說明になると、超時的でばかりあつて、歷時的でも等時的でもない。言語の史實と現相とを超越した不斷な一貫的法則を認識して規律づけようとするばかりである。國語の史實と現相との歷史的心理的說明は蔑視されてゐる。この超時的說明が常に强く教科的規範文典を支配し、記述的文典の成立までは之を認めても、未だ心理的歷史的說明文典への向上は考へられてゐない。言語を規律する所の語法上の法則の先天的實在性を認めて、その法則の發生と根據と變動との說明を歷史的心理的に考察するまでに至らない。

　これは現代國語の實生活を等時的乃至歷時的に考究せず心理的に說明を試みない爲であつて、この點は東洋流の國語學と國語教育との尙古主義文獻主義の餘弊であると思ふ。國語の學問も教育も共に、文獻本位であつて、文を重ん

じて言を輕んずる實際上の規範態度が、教育上にも研究上にも及んでゐるのである。されば大學に於てですら國語學といつても主として文獻國語學たるの觀がある。現在の調査や研究の程度について云ふのではないが、方言學はその文獻偏重の國語學からは度外視される傾きのあるは、當りまへである。上古語中古語の研究價値は現代語の研究價値よりも遙かに優等のやうに誤解されてゐる。然し時勢は推移し、方言採集の急務たることは、古文獻採訪の急務と同樣であると考へられるやうにもなつた。これは材料の點だけについてであつて、說明の點に至つては、文獻語も現方言も共に歷史的心理的說明でない憾が多い。

吾々の物言ひには、論理的說明に依るものよりも、心理的說明を要する現象が甚だ多い。理智に訴へる事情と感情に委する事相とが錯綜してゐる。物言ひには論理的統一と理智的透明とを期しがたくして、矛盾と錯雜と、不規則と不鮮明と、それが個人と集團との間に、個人の平常時と特別時との間に、集團と集團との間に、地方言と地方言との間に、互に交流し流轉して極りがない。文典や辭典や作文法や論理法などは、整理し拔萃し實在的なものから模範的なものを抄錄して示し、自然より技工を拔いて與へてくれる。自身の口の練習と文の修行とによつて自得しつゝ熟達もするけれども、先進よりの傳授によつたり矯正によつたりして次第に規律づけられてゆく。

事實としては、手近いものよりは遠方のものの方が難有がられ、新しいものよりは古いものの方が尊重されがちである。眼前のものはとかくに輕蔑され易い。而も手近い新しい事象の確實なる認識を經て然る後に遠方の古い事象の眞實が認識されるわけである。この見易き道理が一顧されぬのは惜しむべきだと思ふ。例へば日本の文典にしても、それが古くからの文語文典にしろ、又後れて應用的に出て來た口語文典にしろ、或る簡潔な平易な理解し易い規則を設定するために、事實は或は曲解され、或は抹殺され、或は埋沒されたりする。事實はそつちのけにして既定の原則

を改修せずに進んでゆく。その所依の原則そのものの討究は閑却され、その一々の規則は先天的法則として侵すべからざる權威を有たしめてある。口語法より文語法へと遡つて究めらるべきものが、編述の順序上止むを得ずとは云ひながら、文語法から口語法へと規則が天降つてゐる。語法學上の革命は社會上や政治上のそれとはちがふ。いはゆる一般文法の上からなりとも、近くは丁國のイェスペルセンや佛國のブリュノオ等の提出した語法理論からなりとも、國文法上の新考案を作つてみる勇氣は未だ本邦の專門學徒には出て來ないやうである。今は力ある神である。今の神通力を信ずる私たちは今の手近い言語の語法を究めるのが古への遠方の言語の語法の闡明へと進む第一歩であると考へてゐる。然し今は材料が豐富であるの利益を有すると共にあまりに事象が複雜し紛糾してゐる。古への方が文獻が貧弱であるだけに却て始末がつき易いといふ好都合な點がある。一例を云へば、語形論すなはち語詞形態論（モルフォロヂィ）に屬する活用の規則に於ても、口語の活用の方が、標準的には表面單純化されてゐるが如くで、而も事實上には文語の活用との混同、地方言における活用形式との錯綜、個々の動詞について云ふ活用法の不統一は處々に起つてゐる。例へば語原的分解的に見ざる漢語の佐行變格活用の多樣を見よ。それより分派した新しい活用形の支離滅裂、それらを捕捉して規律づけることの困難さは、もし現代の言語事實に直面してみたならば、何人も感じないわけにはゆかないであらう。今この最後に擧げた漢語佐行活用について細說するならば、その漢語の字音の差別から來る所の種類や、その漢語と語尾（舊佐變）との融合程度や、既熟未熟の不卽不離性や、文語への執著關係や、樣々の理由や樣々の牽引作用によつて、混沌狀態にあり流轉極まりなき有樣にあるではないか。言語は實は固定性よりも流轉性が多い。言語の本質から來る所の各自無意識及び有意識の統一力が流離の勢をひきしめてゆかうとするにも拘はらず、動ともすれば統制力がきかなくなる。分裂の勢が強く、分裂の後には新たなる統合が成立たうとする。新しい統合は決して舊い統合

を全然破壞し去ることが出來ない。從つて新しい規範の權威を以て概括するに非ずんば、永久に統合が出來なくなる憂を生ずる。この權威の確立は、古今に東西に、その年代の繼續の多少の別があり、又效力の及んだ表面上の範圍と事實上の範圍とにもかなりの相違があつた筈である。然し統合力の及びきれぬ所に、言語活動の存在が確認されるわけであり、多少とも統合力の及んでゐる所に、亦言語活動の存在が確保されるわけである。而して國語の用言の活用の個々の規則が、八百萬の神々が聯盟的に會議でお定めになつたものでない限り、或は又大神の天降らしめお下だしになつたものでない限り、元々混沌的であり海月なす漂へるものであつたらうことは、物事を發生的に考察してみれば直に會得される。從つて萬葉集の東歌に散見する所の亂雜な活用形の如きも、主として言語の混沌性から說明さるべきものであり、之を大和言葉の標準語の崩壞から起つたと說明すべきものではないと思ふ。卽ち遠心的な方言の分裂性と求心的な標準語の統轄法との相違を意識すれば、吾々は容易に自然な說明法を得るのである。古の言語にも今の言語の如く、心理的に說明せらるべき種々の矛盾や誤謬や反則や變格や無規律やがあり、むしろ一層甚しき點もあつたに違ない。たゞ比較的單純齊整にみえるのは、文獻の不備から率爾速斷するためである。もう一つには傳來の際に於ける整理の結果といふことも、幾分かないではあるまいが、それは割合に少いであらう。然し他方には、太古の社會組織が存外統轄的であつたことが、言語の分散性を比較的強く引締めてゐたかも知れぬことも、むろん考慮されねばならぬ。さりとて後世また今日の言語に見られる幾多の心理的の源因から起る發音上や語法語形語義上の變化は、古代にも等しく存在した筈であり、社會的の源因より來るそれやこれやの動搖も亦免れなかつた筈である。社會的に矯正力または統制力の制裁や效果は、古代に於ては、割合に良く現はれてゐたとも見られるし、又その反對に心理的に識別力が發達しなかつた點から自覺的矯正が不完全であつたとも考へられる。古代における音韻の相通といふ現象

の如きも、かういふ事情から考察されねばならないし、中古以來と見られてゐる音便といふ現象の如きも、時代的に之を遡つて究めなくてはなるまいと思ふ。文語の四段活用における連用言が一二の助動詞に連接する場合にあらはれた音便形が、上二段においては同様の場合に於て全くあらはれてゐない。其の不統一なる源因を、同じ連用形への類推作用すなはち牽引作用にもとづくと說くのは少し物足らぬ。寧ろ上二段より變化した上一段の口語の連體終止已然の諸形と本來の將然形と凡べての活用形の引力の强いのに源因を求める方が妥當であらう。かういふ類推法の勢力の移動も心理的說明によるのほかはないのである。元來、歐洲言語學界における文法學が、論理學の羈絆を脫して心理學へ根據を求めるやうになつたのは、ロマンチック時代に胚胎し、フンボルトに鼓吹せられ、シュタインタアルに成形し、パウルやスヰイトに由つて具體的利用を見るに至つたのである。思想轉機の大體の道筋はかやうに考へ得るのであるが、かういふ方針を以て、おくればせにでも、今後の國文法は研究を出直してゆくべきではなからうかと思ふ。

國語の研究がかやうな狀態に永らく停滯してゐたから、國語の教育もとかくに形式に捉へられ文章教育にのみ局托してゐたのも、亦止むを得ないのである。口語の練習は殊に中等諸學校に怠られてゐる。口語の感情的方面、美感方面は全く等閑に附せられた。言語は理智的方面をのみ考へられ、藝術的一面は無視されてしまつた。文法の教授にあつても、品詞の區分や語詞の品詞所屬や語詞の論理的分類やに關する問題が主要な關心をもたれてゐる。言語教育としてかゝる理智的方面の啓蒙は全く無用とは云はれないけれども、言語教育にはその感情的方面や藝術的方面の開發も必要である。但しこゝにいはゆる藝術的方面とは、單に純文藝に卽して云つたのではない。汎く言語藝術の構成運用に關する方面をいつたのである。吾々の日常生活には道德生活もあればいくらかの宗教生活も殘つてをり、藝術生活も新古種々の形に於て現はれてゐるが如く、言語生活に於ても、在來の文法家の多數が養成や矯正に努力するが如

く倫理的に規範に向つて動く可きものがあると共に、古くは又地方には柳田氏や折口氏等が重きを置いて考へてゐる様な言語上の信仰生活の深いものが認められる。さうかと思ふと、また言語の感情生活ともいふべき肝要な一面が考察に上つてくる。このがはから見ると、音韻の分解的研究や其の種の分解的音韻變化の研究などとともに、表現としての音韻のもつ感覺や音韻の連接が與へる感覺や更にまた音韻の連接に起る抑揚と高低と遲速等から生ずる平常時異常時における言葉遣ひの千變萬化の狀態や、すべてこれらの言語事象を注意して指導に任ずべきのが生きた言語教育の要諦であらう。文字文章のみの教育に走つた結果として、かういふ主要面の教育は在來無用の様に考へられてしまつた。從つて日常の談話にしても、壇上卓上の挨拶にしても、電話や放送の技工にしても、談論講演演說の技術にしても、吾々日本人は甚だ拙劣である。教育上の注意も指導も練習も缺けてゐた結果である。

政治外交の上に屡々現はれてくる用語の意味に關する論爭がある。すなはち概念的な意義よりも寧ろ語の味ひ・心持ち・感情をいふところの意味、その意味からして、往々疑議が生じ紛爭が起る。そこで別な用語の選擇が必要となつて來もし、良い意味の語で粉飾すると、すつたもつたのもつれが解けてもくる。用語の選擇には、語彙の豐富が必要である。語彙の簞笥や箱の裡に言葉の備へが肝心である。尤もそれは一つには讀書や談話等言語修練やの結果にもより二つには各自の言語能力にもよることである。言語の創作や應用や記憶の能力は人々によつて異なるのはわかりきつてゐる。むろん練習がその要因をなす。言語感覺、略して云はれる語感、その語感の練習といふことが是に於てか大切であることがわかる。語義の外に此の語感のはたらきが、吾々の言語生活に於て重要に振舞つてゐることは注意すべきである。これは一々辭書の能く登載し能く說明し盡くすことが出來ない部分であるけれども、若しその語感の活動が捉へ得べく寫し得べきならば、當代の辭書に精しく記載しておきたいのだが、それは中々及ぶ所ではない。

語感といふ術語は廣義に行はれる。吾々の言葉づかひ・言ひまはしが、實際上の場合にあつては、物も言ひやうで角が立つといふ俚諺の如く、屢々双方の語感の適合不適合から、結果の好し悪しをひきおこす。語感の適否は、日常茶飯の事どもに屬しはするが、而も言語學上に取扱はるべき問題の一つであるを失はぬ。その他一口にいふと、語氣とか語調とか云ふことが、言語の能率に影響することが甚だ多いことは、常に經驗する所である。日常平凡なるの故を以て敢て學問上の對象にするに足らぬはずはない。而もこれらの平凡な事象の說明から高遠な事象の鍵が見つかることも多い。語感は、殊に毎語の味ひを成す語感は、個人により、個人の經驗すなはち精神生活の内容によつてかなり違ふ。廣くしては集團にもよつて異なり、大にしては時期時勢によつても異なる。語感は固定的でなく流動的なのが自然である。

國語の敬語は、日本の社會的方面から見て極めて重要であり、國語の規律といふがはからも最も尊重すべき習慣であり法則である。然るに敬語法が近年ますます亂雜に陷りつゝあるのは、嘆かはしいことである。敬語法のことは、國語學界において、現在の國語學者中では、山田氏が深く意を注いで力說したのを多とせねばならぬが、私も、文語に於ても口語に於ても、敬語の練磨は等しく向後の國語教育に於て最も重きをおかねばならぬと信ずる。言語學の上から云ふと、日本の敬語は、語法と語彙との兩方面から觀て、西洋文典の人稱法や代名詞の使用や呼應法(コンコオド)等にも匹敵するものであつて、論理的に大切であることは言ふまでもないが、他面、感情的にも緊要である。言語の能率が必ずしも理解によるのみならず感情の補充によつてもそれが高まり低まることが多い。これは經驗が敎ふるとほりであるが、日本の敬語法の社會的重要性は、普通の國語學書には未だ十分に認識力說されてゐない樣である。口語における敬語法の取扱は、社交上はもちろん、學校教育や家庭教育において、その墮落を防ぎ、その涵養を計らねばならぬ隨

一の事たるを疑はない。之を歴史的に觀じ之を社會的に察するならば、敬語法の簡單化は當然でもあつたし又適切でもある。たゞ之を何處まで簡易化し如何なる程度までに保守すべきかは問題である。階級思想の劃一傾向に伴つて起る敬語法また敬語辭の單一傾向は、固より當然であるけれども、それは階級の無視であつたり敬語の排斥であつたりすべきではない。恐らくば敬語の消滅は國語の廢滅になるであらう。就中、師範教育と女子教育とに於て、前者は普通教育の根本をなし後者は家庭教育の骨子をなすが故に、先づ敬語法の敎授を語法教育の根幹となすべきものだと考へる。敬語法の標準の規定が第一着に成立たなければならぬことは必須であるが、それには日本敬語の心理的社會的基礎と歴史的發生根據とを究める必要がある。實際の國語教育における敬語法の練習は、國民の感情教育を助け他方には社交性をも導く。但しこゝで斷るまでもなく巧言令色を世間の第一義とするわけでもなく、剛毅朴訥の仁に近きを否定する次第ではない。敬語法の簡易化は決して敬語法の確立と矛盾するものではない。現今の極左人の男女兩性とも日常談話すなはち相互同志間のそれと對他階級のそれと、乃至演說や口頭宣傳等における種々の言說に於て、敬語法が如何に存續されてゐるか無視されてをるか、書簡や宣傳文等の場合に敬語が如何に扱はれてをるか。又論議としては當然かくの如き階級意識から生ずる一種の約束は須く打破すべきものとされてゐるだらうと思ふが、私どもは平素さういふ方面の見聞をしないから、何とも明言されない。いづれにした所が、敬語法の確立は、國語の敎育上忽諸に附すべからざる重要なものたる事を失はない。天ならば汝がまにまに、此の國ならば敬語法存すである。敬語法の善用を奬めるといふことは、濫用にも反對することを含むが、世間殊に操觚界にあつては、敬語の濫用不適切な場合が、敬語の語法上にも造語法上にも措辭上にも甚だ頻繁である。又他方から云ふと、大義名分の上から申すと、日本の敬語法は日本の敬語法であつて、漢文ならばともあれ、支那の敬語法を日本の言語文章に適用しようとする思想

は、闇齋流の思想を待つまでもなく、國語規範上これを容認しがたい。自分も三年ほど前に述べた如く、敬語ではないが、「中華民國」などの國名は、支那に對する漢文や時文殊に外交の公文に於ては之を日本人の文章として寛容するとしても、日本文に於ては、日本の漢字は日本國の漢字の用方に從つて差支ないが故に、少しも彼土の使用に盲從するの要はなかつた。語源上正當にして毫も侮蔑の意味を含まぬ「支那」といふ文字を用ゐるべきが至當であると信じて疑はない。況んや「支那」の支の一字、那の一字、共に偶然にも彼土の現勢を能く反映してゐるの嫌はあるが、シナ（チイナ）の名を秦（チン）の一字より起つたといふ通説に從ふときは、秦の時代の如き統一だけはむしろ歡迎してもよい筈だから、寧ろシナの美稱の方を彼等も喜ぶべきだと思ふ。

左翼の人々から起つたか或は左翼の人々に對して起つたかのいづれにせよ、社會思想に關する新外來語および其の短縮形が、段々普通の言語層に浸染して漸く根ざしをもつやうになつた現象は、國語上注意すべき所である。映畫その他各種の娛樂機關から傳播した外來語流行語の横溢といひ、衣食住に關する際限なき外來語の輸入といひ、而して又それら外來語の下略式短縮形や轉訛形や轉義應用や、眼前の國語事象として、一方には吾々をして眉をひそめしめる所甚だ多いが、他方には觀察上の興味も少からぬ事は、すでに前述の如くである。愛國思想と日本趣味とから云ふと、當然かやうな外來語侵入の事相に對して防止または制限の態度に出たいと思ふ向もあるけれども、吾々はその折折の流行性の産物として雲煙過眼視してよいと思ふ。然し外來語や流行語の横行を言語生活のがはからみると、社會自然の要求によつて入り來たり生れ來たものも少からず在り、それが傳播し流行するにも社會上の趨勢に支持されるのである以上は、いつかは賢明なる言語者のおのづからなる取捨によつていつしか淘汰が行はれるものだと私たちは

樂觀もする。半ばは日本人の輕い諧謔趣味からもそれらの新語を歡迎してゐるのではなからうか。私が土岐氏と共に語原を考へて見たインチキの語の如き流行語も、その一である。不幸ながら世相は此の語の存在と蔓延とを助長した。ジャアナリズムから出たか遊子仲間から起つたかを未だ詳かにしないが、彼氏といふ新しい代名詞の如きも、日本語の三人稱卽ち他稱の代名詞の不備からも來た所の自然な要求によつて發生した面白みのある語だと見れば見られる。私たちは寧ろ微笑を以て「彼氏」の運命を靜觀したい。一體、吾々年輩の、吾々たちの言語閲歷をもつ者たちの、使ふ用語は、多少は時と共に移り世と共に進むことはあつても、中年以後に交はつた言語仲間の中心がやはり固定してゐるから、先入主となりどうしても古くなりがちである。同じ舊來の用語同じ新生の用語を使つてゐるにしても、意味に多少の開きがあるのは止むを得ない。況んや思想の開展に伴ふ言語の開展は、個人差は別としても、舊人と新人との間に大いなる隔たりがあるのを免れない。私自身が談話のをりでも講義講演のときでも綴文の際でも常にその點に心づくが、それは致し方がないとあきらめてゐる。又自分の言語閲歷を回顧してみても、外國語の挿入は日常語の場合でも學問語の場合でも過去に遡るだけ多かつた。年をとればとるだけ、外來語を遠ざけ、新生語流行語を斥けたい氣分になる。一時風靡したトテモと云ふ副詞の如きも實際には使へなかつた。然し考へて見ると、飜譯するか或は言換るか或は新造するか模倣するかした所で、それは意味や氣分の上でかなり現代人の使つてゐる意味や氣分と懸隔してゐることが感じられる。他方に於て省みれば、外來語また原語の方が、隨伴する因緣から脱して適切にして效果的である場合が少くないのを吾々は悟る。ゴーとかストップとかの指示にしても、パスといふ掛聲にしても、陸軍の軍隊用語の漢語にしても、使用が促がされる言語心理の根柢は、必ずしもすべて外國語の崇拜模倣の動機ばかりから來るのではない。連想因緣の遮斷から來る適切性と、もう一つは發音上の效果を期すると、この二つがかなり有力に

働く。私は國語のアリガタイといふ語の難有味を、モッタイナイといふ語の深みと共に、常に痛感し讃美してゐる一人であるけれども、餘裕のない急速な場合には、サンキュウの英語の方が遙かに便利であると感じてをる。私はあのお國言葉を斥けて、この紅毛語を奬勵しようなどとは夢さら想はぬのだが、然し私の前論とは逆に、言語を能率的に發音の難易或は寧ろ發音節度の敏活といふがはから觀ると、ア・リ・ガ・ト・ーの四音節に對してサン・キュ・ーの二音節の方が速く出るの長所があることは爭はれない。この種の語に、「失禮」とか「御免」とか「お早う」とか「左樣」とか云ふ種々の挨拶の言方がある。或るものは、形が短縮され音義が轉訛されてゐること、父母の稱呼の兒童語その他の敬稱接尾辭などと同じである。外來語の適否は、能率的に考へるのと愛國的に考へるのとは正反對であるが、或る特別な臨機的な術語として外來語の使用は、特用語として之を能率本位に是認することも亦已むを得ない。異物を愛するといふ好尙心理のほかに別の心理作用がはたらくのである。

西洋からの外來要素としては、譯語のほかに飜譯文體の波及もあり、延いては、外國語法が國語の語法の領域への侵入もある。それが文章法の上に最も多く現はれてをることは、何人も直に氣のつく所であらう。活用法や助辭そのものは不可侵であるが、受身の助動詞が、人の觀念卽ち所有者たる人の觀念をば超えてしまつて、それを人以外の事物へ適用することが、明治以後非常な增進を見た。かくの如きは、現代人が慣れて最早怪まぬ語法の一つである。外來語法の影響を考察した論文には、近年市河三喜氏の二三の發表があることを注意したい。

正不正また適不適の規範觀や歷史觀を別にして考へて、存在を認識して新に歷史的觀察を立てなければならないものに、語源論がある。語源論で厄介なのは本來の國語か變裝の外國語かといふことを檢討することである。成るべく方言で說かうと望んだり、成るべく國語で說かうと思つたり、成るべく外國語で說かうと考へたりする從吾所好の癖

は、一に歴史無視或は歴史無詮索に出づるのであるが、例へばサボルといふ語の普及はこの語を方言だと誤解させ、タバコの轉義はこの語を國語或は其の方言的轉義かと迷信させ、スキ燒のスキはビフテキ等の原語の基本語たるステーキの中略だと醉語せしめる樣な面白い逸話を作つた。これは言語史學における語原說としては全く問題にならない。然し、言語心理上からすると、此の種の所謂民衆語解とも民俗語源考とも稱せられるものの中には、一概に捨てて顧みないわけにはゆかない代物もある。ドイツ語に云ふ所のフォルクスエチモロギイといふ民衆的な語源考は、之を言語史學的に見ると、普通には價値を認められぬけれども、言語生活の實相から觀ると、言語者それ自身が誤解してさうも感じ、さうも考へてしまひ、且つ古くよりさうも信じ傳へてゐるとするならば、學問的語原考からも容易にそれを抹殺し去ること能はずして、さういふ俗解俗信を言語心理上の事實として容認しないわけにはゆかなくなる。それのみならず、言語史家も、既にさういふ新しい事實が發生したならばそれを事實として認めないわけにはゆかない。この本來の舊眞實と假想の新事實とに對して、正邪の區別がつかないことがある。卽ち民衆的語源感がその儘學問的語原考に編入されてしまつたからである。言語心理學的に見た言語實相觀からすると、この民衆的語源感あるひは民衆の語源意識といふものは、それはそれなりに考察を要するのである。この民衆語源感は、時に古くは或種の神話や地名傳說を生み、往々迷信を作つた。

殊に漢字を有理にも無理にも充てて國語を寫してある日本にあつては、漢字から來る所の語源感が、少くとも智識階級の言語者を支配することが多い。古事附け卽ち牽强附會の外に、文字が語源感を徵發する場合が甚だ多い。宛字と知られてをるものは先づ良いが、宛字だと考へられてゐない漢字に、音にしろ訓にしろ、その實宛字が少からずある。漢字の字義に拘泥して說いた劉熙の釋名の如き實例が日本に多きに堪へない。草木禽獸などの物の名に國語と漢

字との不適合は、夙に和名抄の編者も指摘してゐるが、その源順の如き學者ですら、カヂといふ和名は「鍛冶」の二字を「鍜冶」と書きちがへたのから起つた字音語だと誤解したやうな失當がある。近頃には柳田氏が「厄介」の二字の國語由來たることを指摘したのがあり、私も「笑止」の二字について語原考を敷演したことがある。私は多くの例を引くの煩をさけるが、たゞ日本には文字が言語に及ぼした影響の世界無比な現象を言語史實の中に有することを切言したい。これは全く西洋の言語學者の夢想し得ぬ所である。漢字は國語教育上の大障害を來たし國字改良論の起因を成してゐるが、之を古來よりの國語界における事相として見ると、日本人の言語上の二重生活といふ傷ましい事實は、いかに傷ましくても、とにかく日本人の語源意識を幸してをり時には禍してもゐる。普通の言語者のみか、言語研究者を毒してをることが著しいのである。就中、漢字の音訓の二重と漢呉兩音の二重と清濁の二重と、實は二重以上のこともあるが少くとも種々の二重性を意識し、それが時代が違ふ歴時層のみならず等時層に於ても、個人個人の間、集團集團の間、往々齟齬錯綜して統一を見ない。然し融通を容認し、二重性多重性を許容してある所に日本の國民精神の特異性がみとめられないでもない。從つて國語史の上に於ても、これらの厄介な二重主義から來る所の複雜多岐な事象は、とても異邦の言語史には考へられない所の特殊な史的變化を生む。抑も音韻變化の法則といふものは、原理も個々の規則もそれらは共に議論の餘地を有するにしても、日本語にあつては、とかくに紊亂されがちで、一貫した法則やうのものを認めかねる有樣である。一般にこの法則的なものを亂す所の反對勢力として、種々の勢力が考へられる。その中には表音文字の綴字法の感化をも加へてよいのであるが、我が國語にあつては漢字よりの影響の絶大な點を高唱しないわけにはゆかない。

此の音韻法則については、私も古く一考略說したことがあつたが、この法則の原理に關して稍々まとまつた印歐言

語學説を紹介したのは、明治の末期における伊勢時代の安藤正次氏を權輿とするかと記憶する。近年は朝鮮の小林氏の如き新鋭な言語學者のそれに對する疑議も出てゐることである。これを原理的に論ずる前に、少くとも原理的に論ずると共に、印歐言語學者が多年にわたつて音韻の史的考察を試みたが如く、吾々の國語史に於ても、それはむろん文獻上のみならず方言上にも方言比較上にも眼前の現代語についてもであるが、ともかく轉音事象を歸納的に稽査してみる必要があると思ふ。原理的の檢討よりも事實上の調査の方が寧ろ急務である。事實上の考査は、最近柳田氏の方言研究による音訛現象の取扱ひもあつて、歐西に立てられた原理に對する懷疑心は益々增進したのみならず、歐洲に於てすらも既に古くも新しくも、理論的非難の聲は揚がつてゐることは事實である。それにも拘はらず、私は文獻考證學的に或は比較方言學的に、國語に於て事實上の調査を進めてゆくべきが至當だと思ふ。この場合には、いはゆる音韻法則なるものの一般觀念と、支那や南洋や西洋等における各種音韻規則の特殊觀念とを抱きつゝ國語音韻史の研究に進むのがよからうと思ふ。決して直にそれらの規則に普遍的適用性の存在を認めるわけではないが、吾々は法則の有無如何と規則の適否如何とを批判する態度を失はずに行くべきだと思ふ。グリムの音韻規則は、特殊なもの、錢大昕の古無輕唇音説も特殊なもの、いづれも或る時代に或る民族に現はれた現象にすぎないのだから、それを東西に施こして誤らざるものと考へたら、大きな間違であらう。さりとて音韻變化には、反對勢力の妨碍がない限り、盲進性を有するものだといふ原則と、反對勢力の結果かと假定される多くの特例除外例と、二者の甄別は、日本語に於ても見分けられさうである。むろん未だ全般の調査は出來てゐないが、一二の現象について云へば、音韻規則の發見は出來るもので、從つて一般原理の存在は否定出來ないものだと思ふ。また演繹的に考へてもその理法の絕對否定は出來まいと思ふ。また說明原理としての音韻規則の假定なくしては、少くとも語原解釋の根據が臨機應變的說明に陷

つて解釋の理由が薄弱となる。よしやかういふ原理論の討究にまで入らずとも、日本の音韻變化には、印歐古今の語などに比して複雜な要素が作用してをり、西洋の言語學說の應用のみでは、判明せざる勢力が潜み現象が存するのではないかと私は疑つてゐる。再言すれば、漢字の及ぼす勢力が甚微妙に働いて居たと思ふ。その他、印歐言語學の考へたやうな妨碍的勢力には、やはり內には類推法があり外には方言の混交があることは、日本でも當然である。但しヴントがグリム法則を說明したやうな根本的な民族心理的な源因があるかないかは、私の古くは想像したが今は敢て考へ及ばない所である。

言語心理學より受くべき言語史學の利益は大きいこと上來縷述した如くである。更に言語社會學との關係も考へられねばならぬ。これも亦この學問が行くべき徑路である。而して言語哲學がそれらの經驗的科學の上に立つて光明を言語學の上に投ずべきことも期待されねばならぬ。言語史學が音聲學の上に立つ所の音韻史論をば其の重要な一部門とすることも固よりの事である。比較言語學が特に日本にあつては、國語史學より出發せねばならぬことも終始私の主張し來たつた所である。これら諸科諸部門の研究によつて、國語の研究が確實に大成せられ、國語教育の基礎が完全に建設せられた曉には、以て國語の政策を立つべく以て國語の標準を定めることが出來る。而して日本の言語學といふものがそこからおのづから產れて來るのを吾々は氣永に待つべきである。

此の一篇は、最初に斷つておいた如く、概論への序說にすぎない。それも或は懷舊談がまじり或は史談史論が加はり或は自己の立場の辨明に傾き、又概論的形式をはづれて漫筆風にそれていつた。けれども、私の年來の主張や時弊

の警告、將來の日本言語學――日本言語の學にあらぬ日本の言語學――への指針、それらを示すものとして、この序說は高遠なる概論よりも卑近なる實踐談に傾いて却て多少の補益をなし得るのではなからうかと思ふ。（了）

（補　遺）

通例の比較研究と題する言語史學の一形式には屬せしめられず、又對照研究と名づけて異系言語事相の對照によつて當該國語の特徵を吟味する方法に寧ろ近い歸納的言語研究がある。それは一般言語學の領域にあつて、超歷史的なる自然科學的方法によつて、單語における音義關係を廣く世界諸民族の言語に亙つて、統計的に表現法を調査してゆく所の方案である。この方法は、古ギリシヤの自然現出說すなはちプュウゼイ說の方に近く他動附着說すなはちテゼイ說の方には遠く、又日本の國語學史上にいふ所の音義說または言靈觀とも相通ずる觀念に出發する。自然科學的であり、統計的歸納的である點が、とにかく近世式である。それで若し音韻組織の分解に我意を交へず豫斷臆斷を加へず公正に進むならば、その結果に或る期待すべきものが生れるだらうと思ふ。然し音韻の分解と比較とが當を失し、都合次第に我が近代國語學の如き通略延約主義を以て臨むならば、その結果危險計り知るべからざるものが生ずるであらう。音義關係を超歷史的に考究して、東西に一貫した先天的必然性を認識しようと試みること、古今に通じた後天的歸趨を發見しようと企てること、それは固より比較言語學とは抵觸せず、或は將來言語史學に對しても一種の光明を投ずるに至るかも知れない。その方法が歷史的でないと云つても、超時的であつて歷時的でないとしても、それは構はない。これは一般言語學の範圍の問題である。言語の起源論に關聯して相當の結論を形作り新研究となるかも知れない。既成のいはゆる比較言語學とは對象も方法も方針も全然ちがひ、言語史學の範圍外のものである事だけは

確かである。言語系統學や言語分類學に對しては、言語史學が與ふる成果と合せて、相當の寄與を期待されるかもしれない。この方法を以てして、よく行くと、國語表現學上に於て得る所が大なるかも知れない。必ずしも既成の音韻法を循奉せずとも、確實なる音韻法に準據して進むべきは恆に至當である筈だから、吾々は此種の研究を取る所の物理學者乃至心理學者に對しては、須く豫斷を去つて先づ音韻法の設定より進出せんことを切望して止まない。この方式の超時的言語研究は、三四年前、物理學の寺田寅彦氏が試みて發表した論文がある。心理學の城戸氏等の表現研究もかういふ方式に由つてゐるものと思はれるが、その方法は私たちの專ら努むる歷時的方法とは違ふがために、私は未だ十分に眞相を窺ひ知る機を得ないのを遺憾とする。むろん私たちは、歷時的研究でも超時的研究でも共存共榮、相依り相輔けて、言語の研究に貢獻して行けるものだと信じてをる。

（昭和八年二月稿）

目次

昭和八年四月十五日印刷
昭和八年四月二十日發行

岩波講座 日本文學
第二十回配本

編輯兼發行印刷者 東京市神田區一ツ橋通 岩波茂雄
印刷所 東京市神田區錦町 精興社

大森製本

發行所 東京神田一ツ橋通 岩波書店